

マダガスカル研究懇談会ニュースレター

SERASERA50

2024.3.22発行



表紙の写真

マジュンガの港

モザンビーク海峡に面するマジュンガ **Majunga** は古くからインド洋交易で栄えた町です。旧市街マジュンガベ **Majungabe** の南西には今も、当時の雰囲気を残す小さな港があります。停泊するのはブーティ **Botry** と呼ばれる木造のスクナー船です。初めてこの港を訪れた 1990 年ごろはまだダウ船が残っていたように記憶していますが、撮影した時点ではすべてこの船になっていました。

船員の多くはヴェズ **Vezo** と呼ばれる民族集団の人たちです。彼らは、北はヌシベ **Nosy Be** から南はムルンダヴァ **Morondava** あたりまで船を運行し、人と物資を運んでいます。普段はひっそりとした港ですが、船の到着や出航の時には岸壁に物資が溢れ、人を乗せた人力車や三輪のバイクタクシーが行き交い、活況を呈します。

撮影年：2001 年

撮影場所：マジュンガ州マジュンガ

撮影者：堀内孝

目次

表紙の写真 マジュンガの港	1
第 26 回懇談会（大会）講演	
マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ（王霊・精霊祭祀の社）信仰の生成と発展	3
生きもの図鑑 29 ディサ・インカルナータ	39
Moi et Madagascar vol.29	42
Voandalana（土産話）41 マジュンガ	43
追悼：深澤秀夫先生	48
深澤さんへの追悼の辞	49
地上に降りた仙人	50
食にまつわる深澤先生の思い出	52
深澤秀夫先生を偲んで	53
SERASERA が縁で知り合った深澤先生と私	55
マダガスカル研究懇談会の今後について	56
マダガスカル研究懇談会会則	57
第 27 回懇談会（大会）のご案内	62
原稿を募集しています	64
2023 年度世話役・事務局・編集部・会計監事	66
奥付	66

マダガスカル・イメリナ地方における ドゥアニ（王霊・精霊祭祀の社）信仰の生成と発展

和布刈神社・権禰宜／京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任助教

江端 希之

今日は「マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ（王霊・精霊祭祀の社）信仰の生成と発展」と題して発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

今日の発表内容とも関わることで、まずは自己紹介させていただきます。江端希之と申します。旅する「アフリ神主」と称しております、これは神主のアフリカ研究者というような意味です。若い頃は所謂バックパッカーとして、世界の「土着宗教」の聖地巡りなんかをやっておりました。大学卒業後は宗教専門新聞の記者や、宗教ジャーナリズム雑誌の編集員として働いておりました。その後会社を辞めて、アフリカ研究の大学院で博士号を取りまして、大学の研究員や非常勤講師をしてまいりました。また、学生時代に神主（神職）の資格を取っております、神社でも神主として勤務してきました。

現在は北九州市の和布刈（めかり）神社というところで権禰宜として働いております。権禰宜というのは神主の職階のひとつです。和布刈神社というのは、漢字を見ても分かる通り、ワカメを刈る神社という意味です。神社の正面の海（関門海峡）でワカメを刈る神事や、海洋散骨で知られています。私も船に乗っては、人間の骨を海にまくという、吊いを「なりわい」にしております。また、神主と同時に、京都大学アフリカ地域研究資料センターの特任研究員でもあります。

大学院に入学後、調査対象を決めるために様々な資料に目を通していた私は、ある写真を目にしました。それは「千木」のような意匠を持つ、まるで日本の神社のような姿をしたマダガスカルの聖地の建物の写真でした。なぜ遠くアフリカの島国に、日本の神社のような雰囲気のある聖地が存在するのだろうか。この聖地は如何なる場所で、どのような信仰があるのか。私は初めて見るマダガスカルの聖地に、とても惹かれたのです。これが、私とマダガスカルのドゥアニ *doany* と呼ばれる聖地（王霊・精霊祭祀の社）との出会いでした。

それ以来、聖地ドゥアニを調査対象に定め、マダガスカルにおけるフィールドワークを重ねてまいりました。マダガスカルでは、2014年10月～2015年3月、2015年8月～10月、2016年2月～3月、8月～10月、2018年1月～3月、8月～10月、2019年7月～10月、2020年1月～3月の計8回、あわせて約18か月間の現地調査を行なってきました。

その結果、2020年3月に、邦人初となる「全国マダガスカル伝統治療師協会」(*Fikambanam-pirenen'ny Mpitsabo nentim-paharazana eto Madagasikara*) の「伝統治療師」(ピツァブ *mpitsabo*) の資格を取得し

ました。この組織は、マダガスカル共和国公衆衛生省 (*Ministeran'ny Fahasalaman-bahoaka*) 傘下の組織になります。

2022年3月、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) に博士論文「マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成と発展—信仰の具象化に着目して」を提出し、博士号 (地域研究) を取得しました。その後、博士論文を基に、『躍動する聖地—マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成と発展』(春風社、2023年3月刊行) という本を刊行しました。



ここまで書いてきて、ようやく、神社の神主が、なぜアフリカ (マダガスカル) 研究を行うのかということがお分かりいただけたかもしれません。ごく簡単にまとめると、日本の神社での経験を生かして、マダガスカルのドゥアニの研究を行ない、マダガスカルのドゥアニでの経験を生かして、日本の神社で勤務しているということになります。

今回の発表では、拙著『躍動する聖地—マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成と発展』の内容を軸にご紹介させていただきます。

マダガスカルでは近年、様々な王霊や精霊を祀るドゥアニと呼ばれる聖地、王霊・精霊祭祀の社が、国内のみならず国外からも多くの巡礼者を集めています。特にイメリナ (Imerina) 地方では巡礼者の増加に伴って、ドゥアニの社殿や施設が立派になるなどの発展を見せると共に、ドゥアニそのものも増加しつつあります。そうしたドゥアニには様々な宗教的職能者が出入りし、祭祀対象を霊媒や参拝者に憑依させてお告げを聞くといった実践が行なわれています。本稿では、こうしたドゥアニをめぐる宗教実践のことをドゥアニ信仰と呼称します。

では、まずマダガスカル共和国について確認します。マダガスカル語とフランス語が公用語で、主要な民族は約 18。宗教はキリスト教が支配的な地位にありますが、伝統宗教や民間信仰も根強く存在

し、北西沿岸部および東南沿岸部にはイスラーム教も分布します。キリスト教の宗派はプロテスタントとカトリックがおよそ半々です。伝統宗教とは、マダガスカル語でフンバンドラザナ *fomban-drazana*、祖先の慣習と呼ばれる実践を指します。多くの人が、キリスト教と伝統宗教を同時に実践しているのが特徴です。

ボルネオ島のあたりからやってきたマレー・ポリネシア系の人々と、アフリカ人などが混血して現在のマダガスカル人になったとされています。本稿ではドゥアニ信仰の主要な担い手であるメリナ人 (Merina) とサカラヴァ人 (Sakalava) を主に取り上げます。メリナ人は現在は王制が廃止され、東南アジア系の形質が強く、キリスト教が優勢という特徴があります。サカラヴァ人は現在も複数の王家が存続し、伝統宗教が優勢という特徴があります。

下記が、マダガスカルにおける民族分布図になります (図 1. 参照)。メリナ人は、この地図の水色の部分、中央高原地帯のイメリナ地方に多く居住します。イメリナ地方とは 19 世紀のメリナ王国領域に含まれる地方で、現在のアンタナナリヴ州 Antananarivo にほぼ相当する地域を指します。また、サカラヴァ人は、この地図の西部沿岸の黄色の部分、19 世紀のサカラヴァ諸王朝の領域に含まれる地方に多く居住します。ドゥアニ信仰が盛んな地域は、このイメリナ地方とサカラヴァ地方になります。

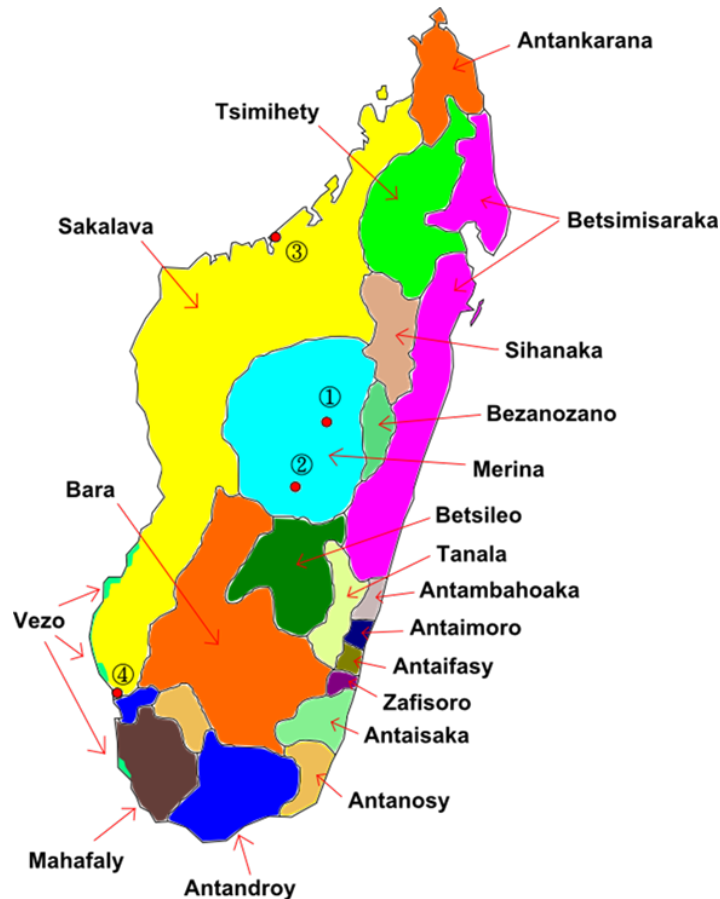


図 1. マダガスカル民族分布図

それでは、私がドゥアニ信仰に興味を引かれたのは何故かという、本研究の根源的な問いと、出発点です。それは、教祖がいるわけでもなく、教典があるわけでもなく、組織的な布教を行なっているわけでもない、伝統宗教に淵源をもつ在来の聖地信仰が、なぜ民族・宗教・国境を超えた巡礼者を集

め、聖地そのものも発展し続けているのだろうか、という疑問です。

そして、ドゥアニ信仰には、教祖・教典・布教組織を備えた既存の一神教的な宗教の発展スタイルとは異なる、独自の発展スタイルがあるのではないかと考えました。そこで博士論文では、中心から周縁へと伝播していく一元的な発展ではなく、モノや霊的存在といった非人間を含めた雑多な存在の間で生じる相互作用の往還運動の中での多元的な発展を構想しました。

下記が、拙著『躍動する聖地』の構成です。第1章から第12章までを3部構成に分け、序章と終章を付してあります。第Ⅰ部では、ドゥアニ信仰の全体像を提示しました。第Ⅱ部では、ドゥアニ信仰の生成について、主に歴史的な側面から検討しました。第Ⅲ部では、ドゥアニ信仰の発展について、イメリナ地方の多数のドゥアニを対象に、信仰の具象化という観点から検討しました。本稿では紙幅の関係から、これらの章の中から一部を抜粋して発表します。

『躍動する聖地』目次

はじめに—マダガスカルに神社の幻影を求めて

序章

第Ⅰ部 ドゥアニ信仰の背景と構成

第1章 イメリナ地方における伝統宗教と社会制度・世界観・人間観

第2章 イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の構成要素

第3章 イメリナ地方におけるドゥアニ信仰と他の宗教の関係性

第Ⅱ部 ドゥアニ信仰の生成

第4章 イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成

第5章 サカラヴァ・ブイナ地方におけるドゥアニ信仰の歴史と変化

第6章 憑依儀礼チュンバの考察

第7章 西インド洋に広がるドゥアニ信仰

第Ⅲ部 ドゥアニ信仰の発展

第8章 イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の具象化

第9章 ドゥアニを巡礼する人々

第10章 聖地マンガベの生成と発展

第11章 マンガベにおける日常実践

第12章 ドゥアニにおける権力関係

終章

あとがき

参考文献

索引

1. 本論の視座

まず、アフリカ宗教研究からみた本論の位置付けを確認します。石井美保によれば、アフリカ宗教研究の問題領域と理論的枠組の変遷は、以下の3つの段階を経てきました [石井 2003a]。1、地域社

会の伝統宗教や世界観の構造機能的解釈と象徴分析。2、植民地化と近代化による伝統社会の崩壊と新たな宗教運動の形成と、その宗教運動の政治的意義の理論化。3、ポスト植民地期のアフリカ社会における宗教現象のグローバル化と、地域レベルの宗教実践が世界システムと密接に結びつく宗教現象の近代化論。そして近年は、さらに議論が多様化しています。

本稿が関係するのは、多様化した議論の中のいくつかの流れに位置づけられます。まずは、前植民地期から現在に至る長期的視点から、ある文化現象がどのような歴史的経緯のもとに成立してきたのかを明らかにするという動向です [ブロック 1994]。本論でも、ドゥアニ信仰をマダガスカル社会における歴史的系譜の延長線上に考察しています。次に、近年アフリカ各地で観察される、在来信仰が民族の枠を超えて広がる現象に着目する動向です [Janzen 1992; 石井 2003b]。本論でも、民族や国境を越えて広がるマダガスカル発祥の憑依信仰を、各民族や各地域ごとの別個の憑依カルトとして捉えるのではなく、聖地ドゥアニを共通項とするドゥアニ信仰として捉え直す必要性を強調しています。

次に、マダガスカルの人類学研究に見られる「イメリナ地方のドゥアニ」について検討します。ブロック、グレーバーといった人類学者らの民族誌の中で、ドゥアニ信仰が断片的に取り上げられる場合があります [ブロック 1994; Graeber 2007]。しかし、ドゥアニ信仰の総体を理解するには、村落民族誌の一部として扱うのではなく、ドゥアニをめぐる実践そのものに注目する必要があります。

また、イメリナ地方で観察される「異教的なるもの」への関心からドゥアニでの実践を調査し、それらを「復活した祖先崇拝カルト」として規定する研究に、モレやキャバンらの研究があります [Cabanes 1972; Molet 1979]。しかしドゥアニを「復活した祖先崇拝カルト」と見なす事には問題があると思われます。なぜならドゥアニ信仰は祖先崇拝に収まらない広がりを持ち、宗教実践の中で創造性が発揮されることで、新たに「生成」を続けていると思われるからです。

近年は、フランス人研究者のみならず、マダガスカル人研究者に牽引される形で、イメリナ地方のドゥアニを扱った重要な研究が出てきています。これらの研究では、聖地ドゥアニの発展を「場所への回帰 (un retour aux lieux)」「歴史の結晶化 (cristallisation de l'histoire)」と捉える視点 [Rakotomalala et al. 2001]、伝統宗教において人々は土地に紐づけられた身分階層に固定化されるが (根付きの原則)、ドゥアニ信仰に参加することで多数のドゥアニ信仰組織を自ら「選択」し、その集団の中で社会的地位を得ることができる (選択の原則) という、伝統宗教の「根付きの原則」とドゥアニ信仰の「選択の原則」の差異の指摘 [Rakotomalala et al. 2001]、全ての人々に開かれた「民衆のドゥアニ」(doanimbahoaka) の概念の提示 [Raison-Jourde 1999]、マダガスカル伝統宗教の具象性の乏しさとドゥアニ信仰の具象性の豊かさの指摘 [Rahamefy 2007]など、ドゥアニ信仰の特徴を論じようとする上で重要な視点が提示されてきました。しかしこれらの研究も、本研究がドゥアニ信仰と呼ぶ対象を「祖先崇拝カルト」として把握しており、それゆえに、祖先崇拝には収まりきれない宗教実践の豊かさを総体として把握しきれないという欠点がありました。そこで本論では、様々な霊的存在を祀る「ドゥアニと呼ばれる聖地」に着目し、ドゥアニを中心として行なわれている宗教実践をドゥアニ信仰と呼称して、総体的に捉えようとしています。

近年ドゥアニでは、社殿の新築や祭祀対象の図像化といった形で、ドゥアニ信仰を視覚的なイメージとして具象化するモノが増加しています。こうした現象を分析するために、本論では、主に以下の2つの理論を参照しています。

ひとつは、物質宗教研究の議論です。台湾における中国民衆宗教を物質的側面から研究したリン・

ウェイピンは、神像・祭壇・位牌などの物質的な形態は、形の無い神々や霊力の「具体的な表現」であると論じました。地域住民の間で神々が「現地化」(localization)され、地域住民が独自の関係を築く具体的な存在へと神々が「擬人化」(personification)されるという文化的メカニズムを通じて、神像と霊媒に力が与えられると述べています [Lin 2015]。

もうひとつが、アクターネットワーク理論の参照です。モノと霊力という観点からアクターネットワーク論をみていくと、ラトゥールは、霊力を内在するモノそのものが、他の存在に影響を与える作用の力(エージェンシー)を発揮して、一つの主体として振る舞うという視点を提示しています [Latour 2005; ラトゥール 2019]。また、ジェルは、聖母マリアの像などを事例に、人間と非・人間が互いにモノを通して働きかけあうことで文化事象が生まれるという視点を提示しています [Gell 1998]。

リンの物質宗教論やジェルの霊的エージェンシー論から「信仰の具象化」の動態をみるならば、以下のような視点を得ることができます。ある信仰がモノ化・具象化されることで、信仰対象のエージェンシーの発揮が強化され、実践者である人間とモノや信仰対象などの非人間の間でのエージェンシーの連鎖・往還が促進され、それをとおして信仰が発展していく、という視点です。本論では、このような視点から具体的事例を検討していきます。

以上を踏まえて本稿の目的は、信仰の具象化によるエージェンシーの連鎖(往還)に着目しながら、ドゥアニ信仰発展の特徴を示し、結果としてドゥアニ信仰がどのような輪郭を生じ、人々にとってどのような存在となってきたのかを明らかにすること、になります。

2. ドゥアニ信仰の概要

本稿が対象とするイメリナ地方のドゥアニ信仰の概要を説明します。ドゥアニとは、サカラヴァ人起源の言葉です。現在サカラヴァ地方では、「王宮」や「社(やしろ)・聖地」を意味する言葉として使われます。イメリナ地方では、伝統宗教に淵源をもつ在来の聖地の総称として使われます [Baré 1980; Estrade 1985; Rakotomalala et al. 2001; Kneitz 2018]。多くの参拝者は憑依儀礼チュンバ *tromba* を行ないません。メリナ人の伝統宗教を淵源とする諸要素から構成されるものの、村落共同体の伝統宗教とは異なる実体を持ち、ドゥアニ信仰実践者の多くが自身をキリスト教徒であるとも考えています [Rakotomalala et al. 2001; Blanchy et al. 2006; Rahamefy 2007]。そして、憑依儀礼をはじめとする宗教実践や、使用される単語をはじめ、歴史的にサカラヴァ地方のドゥアニ信仰の影響を強く受けています [Cabanes 1972; Molet 1979; Rakotomalala et al. 2001]。

イメリナ地方のドゥアニ信仰の基本的な観念は、メリナ人の伝統宗教に基づいています。それらの観念のうち、いくつかは、イスラームの影響が見て取れます [Molet 1979]。伝統宗教は村落共同体の祖先崇拜で、特定の親族集団のみが参加できる閉じた体系です。墓を重視し、血縁・地縁共同体に縛られた宗教といえます [Raison-Jourde 1999]。一方、ドゥアニ信仰は、親族集団・社会階層・民族出自に捉われない、開かれた宗教実践です。祖先霊以外の精霊も祭祀し、墓以外にも聖地となります。多数の聖地や信仰組織を自ら選択できる自由さがあります [Rakotomalala et al. 2001]。人々は日常実践において、願い事によって伝統宗教とドゥアニ信仰を使い分けており、両者は補完的な関係性にあります。

現代マダガスカル社会では、キリスト教が支配的な地位を占めています [Andriamanjato 2013]。そん

な中、イメリナ地方のドゥアニ信仰とキリスト教は、ドゥアニからキリスト教への「片思い」の関係性にあると言えます。ドゥアニ信仰側は、キリスト教のモノをドゥアニに取り入れるなどして、キリスト教の承認を得ようとする傾向があります。また、ドゥアニの宗教的職能者・参拝者の多くが自身をクリスチャンと自称しています [Rakotomalala et al. 2001; Blanchy et al. 2006; 江端 2017]。一方キリスト教側は、ドゥアニ信仰は低俗な迷信で、異教の残滓であるとして、軽蔑・敵視する傾向があります。近年、福音主義、リバイバル派、ペンテコステ派などに分類される教団、例えばジェソシマムンジ (*Jesosy Mamonjy* : イエスの救済教会) などの新興宗派の一部信徒が、各地のドゥアニへの放火や破壊を繰り返しています [Raharinjanahary et Gueunier 2006; 江端 2017]。

イメリナ地方に大きな影響を与えているサカラヴァ地方についてまとめます。サカラヴァ地方のドゥアニ信仰が、イメリナ地方より先に成立していました [Kneitz 2018]。王制が廃止されたメリナ人とは異なり、サカラヴァ諸王朝の王家は、聖地ドゥアニを中心とするサカラヴァ伝統宗教の祭主として、現在に至るまで存続しています [Lombard 1973; Baré 1980; Feeley-Harnik 1991]。つまり、イメリナ地方のドゥアニ信仰が、その中心的な権威を持たないのに対して、サカラヴァ地方のドゥアニ信仰は、王家という中心的な権威を持っています。

北西サカラヴァ王国群においては憑依儀礼チュンバが重要で、王家には公式な霊媒が存在し、霊媒に憑依した王霊と、生きている王との対話により、王国を運営するということが行なわれてきました [Baré 1980; Feeley-Harnik 1982; Estrade 1985]。サカラヴァ地方では一般的に、ドゥアニとは王家を祭主とする聖地を指します。しかし最近ではイメリナ地方と同様に、民間の聖地も含めて聖地全般をドゥアニと呼ぶ傾向が生じつつあります [Rakotomalala et al. 2001; Kneitz 2018]。サカラヴァ地方もイメリナ地方と同様、国内外から民族・宗教を超えた巡礼者を集めています [Kneitz 2018]。

ドゥアニ信仰の祭祀対象たち、すなわちドゥアニ信仰のパンテオンを説明します。パンテオンとは、ある一つの宗教体系を構成する神々ないし霊的存在の全てのことで、しばしば階層構造を為しています。

ドゥアニの祭祀対象としては、まず、①王霊・王族霊・貴族や著名な軍人・占い師などの王国時代の偉人霊、があります。これらは、しばしば神々とも同一視されます。つぎに、②神話的な先住民で、自然界の霊としての性格も強い土着の精霊 (ヴァジンバ *vazimba*)。そして、③水の女精霊ないし「人魚」(ザザバビンジャヌ *zazavavindrano*) や、「小人」(カラヌル *kalanoro*) といった最近流行の精霊など。さらに、④水源や巨石や聖なる木など自然物。ドゥアニ信仰では伝統ある精霊が中心的存在ですが、新たな精霊たちも生まれ続けています。先述した①、②、③の祭祀対象は、それぞれ固有名と個性を持ち、霊媒や信徒に憑依する憑依霊でもあります。つまり、本発表に出てくる憑依霊とは、ドゥアニの祭祀対象のことを意味します。一方、④の祭祀対象は、自然物に霊的存在を認めるアニミズムの色彩が強く、精霊としての固有名を持たない場合があります。また近年、水の女精霊には、西洋起源の人魚のイメージや、日本のアニメキャラクターの影響も見取れます [江端 2022]。

ドゥアニの形態はおおよそ5つに分類できます (図2. 参照)。タイプAのように社殿があるもの、タイプBのように墓に祭壇を付け加えたもの、タイプCのように木や岩や水場に祠や祭壇を設置したもの、タイプDのように人工物が無いもの、あと写真は省略しましたが部屋の一角に祭壇を造りドゥアニと称するタイプです。

ドゥアニは、参拝者が増えていくと、タイプDからタイプCになり、そして最終的にタイプAへ

と「発展」していく傾向があります。つまり、参拝者が増えるごとに、聖地に建つ構造物が増えていく事になります。



図 2. ドゥアニの形態

ドゥアニの聖域内や社殿内の空間構成ですが、これは基本的には、アラビア占星術に由来するマダガスカル伝統の運命論ヴィンタナ (*vintana*) に基づいています。この世の時空間、全ての要素（自然現象、超自然的な力、祖先、人間、動物、植物など）が、ヴィンタナの規則によって編成されているとされます。このヴィンタナに基づくマダガスカル伝統の太陰暦のカレンダーが、アリマナカ (*alimanaka*) です。アリマナカは、吉日や凶日分かる運勢暦として使用されます。この暦を参照することで、建築、結婚式、葬式、改葬祭、割礼祭、憑依儀礼、ドゥアニ参拝などをいつ行なうべきかが分かります。

各方角は、ヴィンタナに基づいて月・星座・四元素が対応し、それぞれが意味を持っています (図 3. 参照)。北東が最も神聖な方角とされ、北を祖先の方角、東を神の方角、西を世俗・外部の方角、南を奴隷の方角とします [Molet 1979]。理念的には、村落や民家、さらにはドゥアニの社殿の構造も、この方角の観念に基づいて設計されます。これは例えば、最も神聖な方角である北東側か、北東に準じて神聖である北側か東側に、ドゥアニにおいて最も神聖な構造物 (祭壇など) が配置される、といったことです。

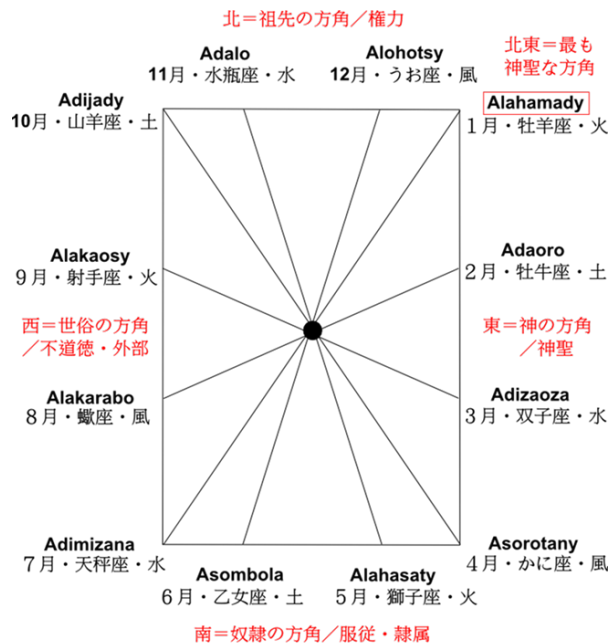


図 3. ヴィンタナに基づく時空間の観念

(ALIMANAKA MALALASOA 2015 FANANDROANA, MALALASOA Fidy 等より作成)

つぎにドゥアニ信仰の職能者です(図 4. 参照)。ドゥアニに常駐し、ドゥアニの祭祀と運営を担う、祭司と守護者を兼ねるピアンジュ *mpiandry* たち。宗教的リーダーのピタイザ *mpitaiza* と、その信徒タイザ *taiza* たち。ピタイザとタイザたちは、ひとつの信徒集団タリカ *tarika* を形成します。その他に、霊媒師(サハ *saha*、サハベ *saha-be*)、伝統治療師(ピツァブ *mpitsabo*、ピマシ *mpimasy*、パナシチャナ *mpanasitrana*)、占星術師(パナンジュ *mpanandro*)、土占い師(ピシキディ *mpisikidy*)、マッサージ師(パヌチャ *mpanotra*)、予言者(パミナニ *mpaminany*)などが存在しますが、たいてい一人の人物が複数の肩書を持っています。宗教的リーダーのピタイザの多くが、霊媒師と伝統治療師を兼ねていることが多いです。ここでいう伝統治療師とは、私が所属している「全国マダガスカル伝統治療師協会」の伝統治療師(ピツァブ)と同じです。伝統治療師の治療方法は、薬用植物を使用した療法と、霊的存在の力を借りる魔術的・宗教的な療法の2つに大別されますが、これらの療法はしばしば併用されます。



ピアンジュ



ピタイザ



霊媒・伝統治療師

図 4. ドゥアニ信仰の職能者

下記が、ドゥアニの組織図です（図 5. 参照）。ひとつのドゥアニは、そのドゥアニを信仰する多くの信徒集団に支えられています。宗教的リーダーとしてのピタイザは、自身の信徒集団から寄付を集め、ドゥアニに献金したり、建築物を寄進したりします。こうした信徒集団は、複数のドゥアニを崇拝対象としていることが多いです。これらが、ドゥアニを支える中核的な信仰者層になります。一方、特定の信徒集団には属さずに、個人や友人同士、または家族や親族集団ごとにドゥアニを参拝し、直接ドゥアニに寄付を収めるといった信仰者層も多いです。

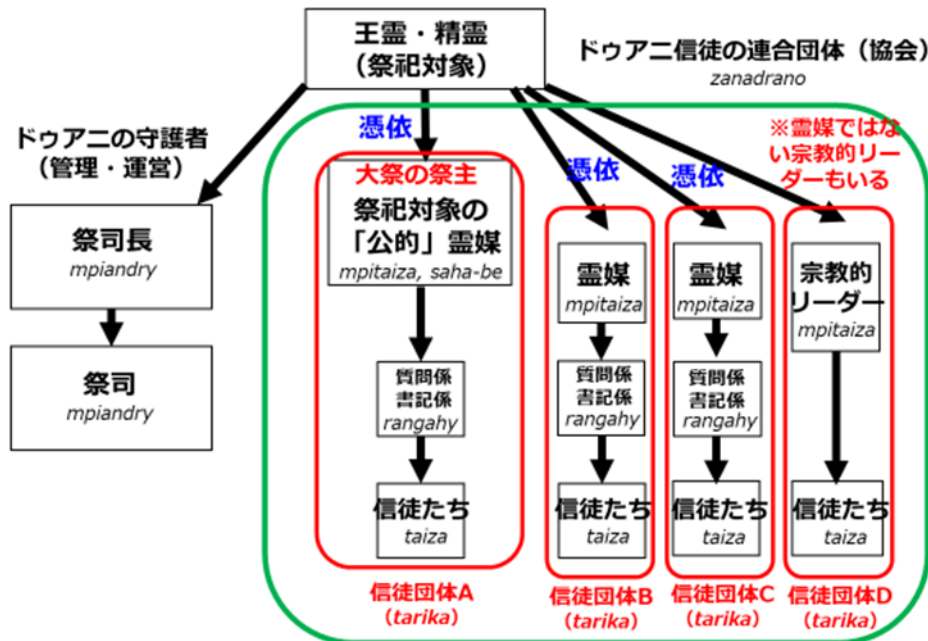


図 5. イメリナ地方のドゥアニの組織図

3. ドゥアニ信仰の生成

それでは、以上のようなドゥアニ信仰の姿は、どのような歴史的な経緯の中で、いつ頃生まれてきたのでしょうか。次にドゥアニ信仰の歴史を検討します。

ドゥアニ信仰の源流となる伝統宗教の諸要素（新年祭などの季節の祭典、牛などの動物供犠、祖霊崇拝、呪物祭祀、聖地崇拝、憑依儀礼など）が現われてくるのが、メリナ王国の初期、16世紀ごろになります。これらの諸要素が、メリナ王国の国家的伝統宗教へと発展していきます [Delivré 1974; Molet 1977; Raison-Jourde 1983]。

18世紀末になると、英雄王アンジアナンプイニメリナ Andrianampoinimerina（在位：1787-1810）が登場し、分裂していたメリナ王国を再統一し、政治・経済・社会の各方面を革新して力を蓄え、周辺の征服事業を開始し、メリナ王国の領土を大きく拡大していきます。彼は同時に、伝統宗教の整備と国家宗教化を進めました [Molet 1977; Raison-Jourde 1983; Brown 2001; Campbell 2012]。この頃、サンピ *sampy* と呼ばれる呪物崇拝の組織化が進み、神殿や聖職者組織が整備され、多神教化します。こうしたサンピの神殿と並行して、王霊やヴァジンバの精霊を祀る聖地崇拝も存在していました。なお英雄王アンジアナンプイニメリナは、イメリナ地方の聖地崇拝、後のドゥアニ信仰の、中心的な祭祀対

象となっていきます。

19世紀中頃になると、ラダマ I 世 Radama I (在位：1810-1828) がマダガスカル島の征服を促進します。この頃から、購買によってアフリカからの人々が奴隷階層に流入したほか、戦争捕虜となったサカラヴァ人などの異民族がメリナ人奴隷階層に大量に流入してきます。またラダマ I 世は、サカラヴァ王霊をメリナ王霊の系譜に組み込むということも試みました [Brown 2001; Ballarin 2006; Campbell 2012]。さらにその後、キリスト教を禁止した女王ラナヴァルナ I 世 Ranavalona I (在位 1828-1861) のもとで、国家的伝統宗教が絶頂を迎えます [Raison-Jourde 1983; ブロック 1994; Brown 2001; Campbell 2012]。

しかしその後 1869 年に女王ラナヴァルナ II 世 Ranavalona II (在位 1868-1883) はイギリスの組合教会派のプロテスタントに改宗し、キリスト教が国教になります [Raison-Jourde 1991; Hübsch 1993; Brown 2001]。そうして女王は国家呪物サンピを破壊し、サンピ崇拝の神殿や聖職者も廃止し、国家的伝統宗教は崩壊しました [Molet 1977; Raison-Jourde 1991; Hübsch 1993; Brown 2001]。その一方で、村落共同体の伝統宗教は「慣習」と見なされ黙認されました [Raison-Jourde 1991]。また、王霊や精霊(ヴァジンバ)を祀る聖地も存続しました [Scott 2003; Saretzki and May 2011]。

なお、メリナ王国時代は大きく貴族(アンジアナ *andriana*)・自由民ないし平民(フヴァ *hova*)・奴隷(アンデヴ *andevo*)の3階層に分けられ、さらに下位区分として細かく分かれる身分階層が存在しました。こうした身分階層区分は絶対的ではありましたが、特定個人の階層への帰属は、降格や解放により流動性が存在しました [Berg 1975, Domenichini and Domenichini 1982, Campbell 1988, Rakoto 1997]。

1896年、フランスとの戦争に敗れたメリナ王国が滅亡し、フランスによるマダガスカル植民地支配が始まり、奴隷制が廃止されます [Brown 2001; Ellis 2014]。フランスは、植民地支配の妨げとならない範囲で、伝統宗教と聖地崇拝を黙認しました [Rakotomalala et al. 2001]。村落共同体の伝統宗教と、私的祈願の性格を強めた聖地崇拝の分離の傾向が強まりますが、このときに聖地崇拝をリードしたのが、元奴隷階層の人々でした [Cabanes 1972; Raison 2007]。1920年代に入ると、イメリナ地方の聖地崇拝者のネットワークを形成し、連合体(協会)を設立しようとする動きが生じてきます。この結果、1940~1950年代に、聖地崇拝者から成る「伝統治療師協会」が設立されました [Cabanes 1972; Raison 2007]。またこの頃には、伝統治療や憑依の実践などをとおして、イメリナ地方とサカラヴァ地方の聖地間の交流の事例が見られました [Molet 1977]。

1947年、フランス植民地政府・入植者に対する不満が爆発し、マダガスカル人による大規模な反乱が発生しました。フランス軍による苛烈な弾圧と虐殺により反乱は鎮圧されましたが、反乱に起因してマダガスカル人10万人程度が死亡したと推計されています [Tronchon 1986; Brown 2001]。この結果、マダガスカルには深刻な社会不安が生じました [Tronchon 1986; Brown 2001; Cole 2001]。

こうした社会不安の中で、王霊や精霊を祀る聖地崇拝が非常に盛んになりました [Molet 1977; Raison 2007]。また、サカラヴァ起源の憑依儀礼チュンバがイメリナ地方の聖地で盛んになり [Molet 1977; Sharp 1996; Raison 2007; Rossé 2021]、サカラヴァ起源の語彙を借用することで聖地がドゥアニと呼ばれるようになっていきます [Rakotomalala et al. 2001; 江端 2017; Kneitz 2018]。この頃、祭司役などのドゥアニの聖職者が登場していることが確認できます [Cabanes 1972; Molet 1977]。この頃すでに、アンジアナンピイニメリナを中核に様々な王霊を再編成する、ドゥアニ信仰独特の祭祀対象のパンテ

オンの再編成の事例が報告されており [Rakotomalala et al. 2001]、本稿では、この植民地期後期に、イメリナ地方におけるドゥアニ信仰が成立したと捉えます。

下記が、イメリナ地方でドゥアニ信仰が成立するまでを模式図としてまとめたものです(図 6. 参照)。メリナ王国初期の祖先崇拝、王霊・精霊崇拝、呪物サンピ祭祀などが、メリナ王国後期に国家的伝統宗教としてゆるやかに統合されます。しかしこれが崩壊し、村落共同体の伝統宗教と、王霊・精霊祭祀の聖地崇拝に分離します。植民地後期に、サカラヴァ地方の影響を受けた聖地崇拝が、ドゥアニ信仰として成立します。

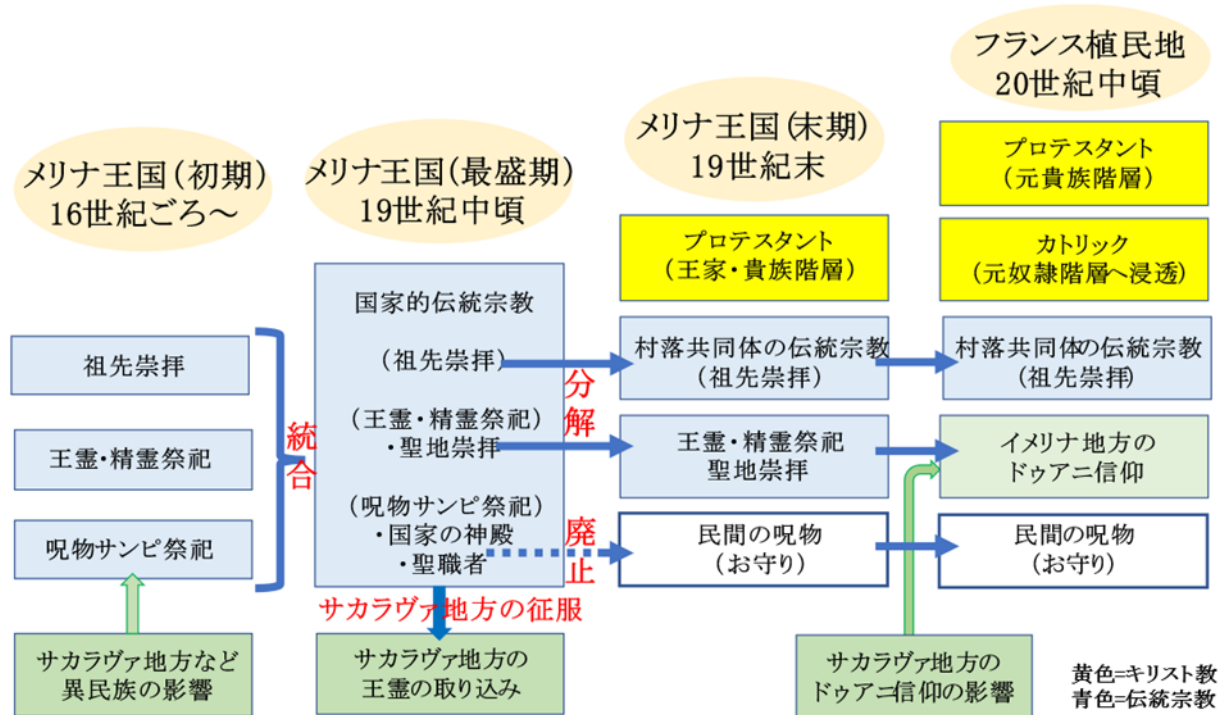


図 6. イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の成立までの模式図

1960年にマダガスカル共和国が独立すると、宗教の自由化により、ドゥアニ信仰が興隆します。植民地政府は、フランスへの反乱の精神的支柱となることを恐れて、ドゥアニ信仰にも関わるメリナ王国関連の宗教実践のいくつかを抑圧・禁止していましたが、それらの禁止が解除されたのです [Cabanes 1972; Vérin 1992; Scott 2003; Saretzki and May 2011]。この頃から、聖地ドゥアニの数が増加し始めていること、民族を超えたドゥアニ巡礼が盛んに行なわれていることが報告されています [Cabanes 1972; Rakotomalala et al. 2001; Scott 2003]。

1970年代にマダガスカルは社会主義化し (マダガスカル民主共和国)、この時に社会のすべての面を「マダガスカル化」するということが行なわれました。このとき、伝統宗教的なものも同時に活性化します [Raison-Jourde and Roy 2010; Randriamarotsimba 2016]。この頃、フランス領レユニオン島では、マダガスカル起源のエスニシティを肯定するアイデンティティ肯定運動が展開されました [Dumas-Champion 2008]。1970年代以降、レユニオン島を始めとする西インド洋の島々からのドゥアニ巡礼者が増加し始めます [Scott 2003; 江端 2017]。

世界的な民主化・自由化の機運を背景に、1992年にマダガスカルでも社会主義路線が終焉し、新政

権への移行と共にマダガスカル共和国へと再改称されます。1990年代になると、文化省の文化的再生プロジェクトというものが実施されます。これにより、メリナ王国の新年祭や沐浴祭が公的に復活します [Raison 2007]。この頃から、各地のドゥアニで多数のマダガスカル国旗を掲げるようになります [江端 2017]。また、社会の前面にドゥアニ信仰が出てきたことで、キリスト教会によるドゥアニへの敵意が高まります [Raharinjanahary et Gueunier 2006; Raison 2007]。またこの頃に、政府によって「全国マダガスカル伝統治療師協会」が設立され、伝統医療が国家によって公認されていきます。

2000年代に入ると、聖なる王都アンブヒマング *Ambohimanga* がユネスコ世界文化遺産に登録されます。その結果、一部のドゥアニが「伝統文化」として、文化資源・観光資源と見なされるようになります [Saretzki and May 2011; 江端 2017]。また、通信手段や交通網の発達により、西インド洋からのドゥアニ巡礼がますます盛んになります [Rakotomalala et al. 2001; Kneitz 2018]。ドゥアニの社殿や施設の新設、祭祀対象の図像化など、「信仰の具象化」が顕著になってきます。

社会的階層制が廃止されて以降、メリナ人の目に見えない過去の階層に対する意識は固定化され、元貴族階層および元自由民・平民階層は「白い人」(ウルンプチ *olompotsy*)、元奴隷階層は「黒い人」(ウルマインチ *olomainty*) と区分されるようになります [Rakoto 1997; Ottino 1998]。今まで見てきたような歴史的な経緯から、イメリナ地方のドゥアニ信仰の主要な担い手は、メリナ人の中では元奴隷階層が多いです。王国時代末期にプロテスタントを受容した元貴族階層には、「異教」ないし「迷信」であるところのドゥアニは恥ずかしいという意識があり、あまり参加しないか、人目を避けて参拝します。ただしサカラヴァ地方は状況が異なります。というのも、王家がドゥアニ信仰の祭主だからです。

それでは、先ほどから名前が出ている、「全国マダガスカル伝統治療師協会」(マダガスカル語名：*Fikambanam-pirenen'ny Mpitsabo nentim-paharazana eto Madagasikara, FMNPM* フランス語名：*Association Nationale des Tradipraticiens de Madagascar, ANTM*) とは何なのでしょう。この組織は1990年代後半、マダガスカル政府によって設立されました [Corrèges 2016; Didier 2017]。本部協会の傘下組織として、マダガスカルの各地方に計17の地方協会が存在します(2020年時点)。この協会は公衆衛生省 (*Ministeran'ny Fahasalaman-bahoaka*) の傘下組織であり、同協会所属のピツァブは国家公認の資格を有することになります。現在の協会の総長はドゥアニ信徒でもあります。

国家による伝統医療の公認化とドゥアニ信仰の関係について、歴史的経緯を概観します。1978年のアルマ・アタ宣言において世界保健機関 WHO は、アフリカの国々における伝統医療の活用を勧告しました。これは社会経済的な理由で近代医療を受けることが困難な人々の健康を向上させることを目的とする施策でした。マダガスカルでもこの勧告を受けて、15年ほどかけて、伝統医療を国家のシステムに組み込む準備を進めました。その結果マダガスカル政府は1992年、保健省に、薬学・伝統医学部門 (*le Service de la pharmacopée et de la Médecine traditionnelle: SPMT*) を設立しました [Corrèges 2016; Didier 2017]。

さらに1990年代後半にマダガスカル政府は、伝統医療の公正な実践を目的として、保健省の管轄下に伝統治療師の全国協会を設立しました。これが、全国マダガスカル伝統治療師協会です。さらに政府は、伝統医学国家諮問委員会 (*le Comité national consultatif de la médecine traditionnelle*) も設立しました。この目的は、「生物多様性条約 (CBD)」に従って、「知的財産権および先住民族の知識の保護を強化すること」にありました [Corrèges 2016; Didier 2017]。

その後、2002年にもWHOは「WHO 伝統医療戦略 2002-2005」を発表し、伝統医療を国の医療制度に統合するために必要な法的措置を講じるよう加盟国に対して要請します。これを受けてマダガスカル政府は2006年、「改良した伝統治療薬」を公共医療施設に組み込むことを許可しました [Corrèges 2016; Didier 2017]。

以上のように、国際的な政治の動向を起因とするマダガスカル政府の「伝統医療・伝統治療師の公認化」の動きは、結果としてドゥアニ信仰実践者からなる伝統治療師の活動を活性化させ、ドゥアニ信仰の権威をも後押しすることとなりました。

4. ドゥアニ信仰の実践

それでは次に、現在のドゥアニで行なわれている実践を検討することで、ドゥアニ信仰の生成発展の動態を検討します。まず誰がドゥアニを参拝するかですが、一般の家族や個人はもちろん、ドゥアニの信仰組織の信徒が、宗教的リーダーに引き連れられて参拝します。他にも伝統治療師などもやってきます。

何を目的に、いつ参拝するかですが、健康や安産多産、勝負事や試験合格、仕事の成功や金運向上などといった様々な現世利益のために参拝します。あとは、病気治療のために、伝統治療師と患者がやってきます。祭祀対象を憑依させて治療を行ったり、呪薬や呪物を作成したりします。願いが叶ったら必ず「お礼参り」をして、動物供犠などを行なう必要があります。また、お祭りには多くの参拝者が集ります。

いつドゥアニを参拝すべきか否かという規制もあります。人々は、マダガスカル伝統の暦・運勢暦（アリマナカ *alimanaka*）を見て、適切な時期に参拝します。またドゥアニには様々な禁忌（ファディ *fady*）が存在し、何らかの禁忌を避けて参拝します。ドゥアニごとに固有の禁忌がありますが、イメリナ地方のドゥアニで共通の禁忌は、豚の禁止（豚を聖域に入れてはならない、供物として殺して捧げてはならない、豚を食べてはならない）や、「禁忌の日」とされる火曜日の参拝禁止です。

参拝して何を行なうかですが、まず水場で沐浴します。次に祭壇に供物を供えたり、ガチョウなどの鳥を供犠して捧げます。祭司ピアンジュが「祈願の言葉」を奏上し、参拝者の願いを祭祀対象に届けます。このときにしばしば憑依儀礼チュンバが行なわれます。

憑依儀礼の流れですが、まず儀礼音楽師による音楽が始まります。次に霊媒か参拝者が憑依状態に入ります。憑依霊ごとに衣装が決まっているため、その衣装を着せたりします。憑依された者は、憑依霊として振る舞い、挨拶し、踊り、話し、お告げを述べたり呪薬を調合したりします。憑依霊が去ると、ぐったりと倒れる場合が多いです。下掲の写真は、マダガスカル南部から巡礼にやってきた信徒集団のバラ（*Bara*）人の霊媒がメリナ王国の王霊に憑依され、王霊として踊っているところです（図7. 参照）。このように民族の異なる王霊が憑依するのも普通です。



図7. ドゥアニの社殿前で憑依状態となり、王霊として振る舞い、踊るバラ人の霊媒

パトリキヤ（仮称）率いる信徒集団を具体例に検討します。パトリキヤはドゥアニ信仰集団のリーダーで、霊媒で伝統治療師でもあります。左下の写真の男性です（図8. 参照）。周囲の情報によれば、パトリキヤは元奴隷階層出自とされていますが、自身に王霊を憑依させることで、霊的に王家と親族関係を結んでおり、自分は王族であると称しています。彼の信徒集団には、トランスジェンダー、中国系人など、マダガスカル社会のマイノリティが参加しています。信徒らも憑依儀礼をつうじて、王霊や精霊そのものになることで、社会階層を超えることができます。このようにドゥアニ信仰においては、一時的ないし想像上ではありますが、憑依儀礼をつうじて社会階層（現代の想像の社会階層制）を超越することができます。



宗教的リーダー（霊媒）のパトリキヤ



憑依状態の中国系信徒(右)



ドゥアニ巡礼で踊る信徒ら⁵⁶

図8. パトリキヤ率いる信徒集団のドゥアニ巡礼

次に、西インド洋におけるドゥアニ信仰の広がりについて見ていきます。マダガスカル周辺の島々に広がっています（図9. 参照）。レユニオンとモーリシャスはイメリナ地方のドゥアニに巡礼に来る場合が多く、マヨットとコモロはサカラヴァ地方のドゥアニに巡礼に来る場合が多いという差があり

ます。これは地理的な要因のほか、自らの霊的なルーツがメリナとサカラヴァのどちらにあると考えるかで、巡礼先に差異が出てくるものと思われます。

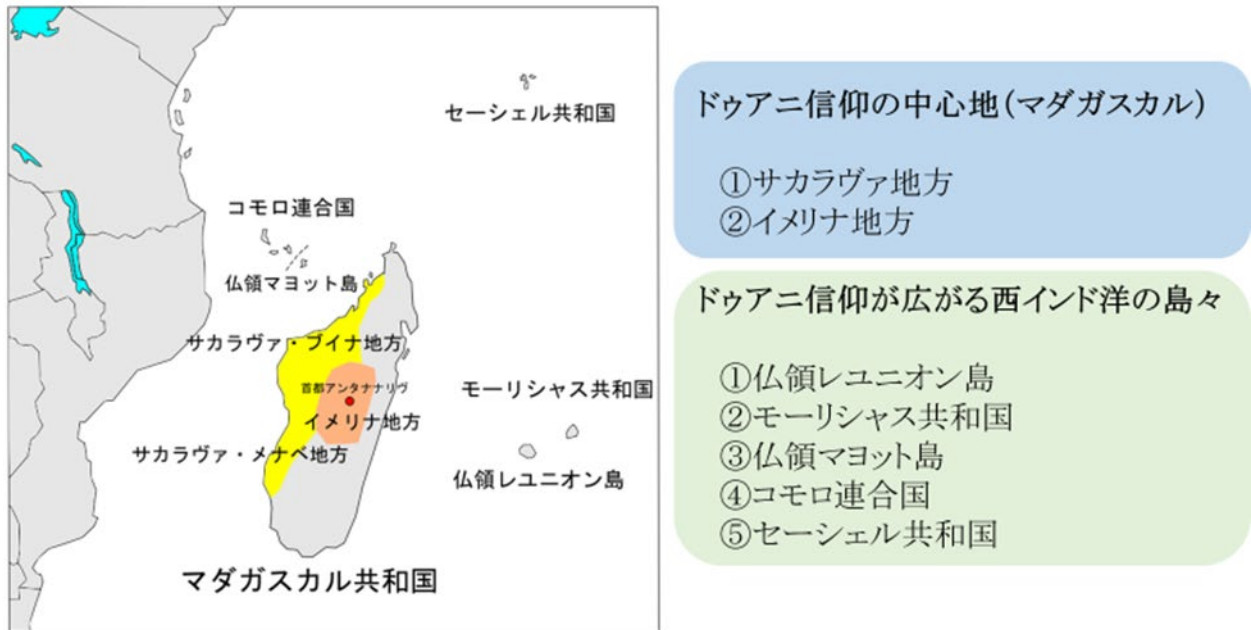


図 9. 西インド洋におけるドゥアニ信仰の広がり

それでは、なぜわざわざ外国から、マダガスカルの聖地に巡礼にやってくるのでしょうか。レユニオン、モーリシャス、コモロ諸島はそれぞれ異なる歴史的な経緯をたどってきましたが、以下の共通点があります。それは、①奴隷や労働者・移民などの形で多くのマダガスカル人が移住してきたこと、②民間信仰の実践の中でマダガスカル起源の精霊が崇拝されていること、③マダガスカル起源の憑依儀礼が行なわれていること、の3点です [Benoist 1998; Pourchez 2000; Andoche 2007]。

また、以下の要素も、巡礼の動因として働いていると思われます。1970年代、特にフランス領レユニオン島において興隆した、アフリカ系やマダガスカル系の出自を肯定する「アイデンティティ肯定運動」によるマダガスカル起源の伝統の肯定 [Dumas-Champion 2008] がひとつ。そして、マダガスカルのドゥアニ側に、積極的に外国人巡礼者を受け入れ、レユニオンやモーリシャスにドゥアニを建立するのを手助けしたドゥアニ祭司が存在したことです [江端 2022]。

モーリシャスは人口の過半数がインド系の人々ですが、こうしたインド系の人々もマダガスカルのドゥアニに巡礼にやってきます。これは、実際に祖先がマダガスカル人かどうかに関わらず、民間信仰をとおして想像上の故郷としてマダガスカルが想起されることで、巡礼の動因として作用したことが想定されます。モーリシャスの民間信仰には、家の守り神の祭壇ガーディアン・ラカズ (*gardien-lakaz*) と家の中庭の祠ガーディアン・ラクール (*gardien-lakour*) があります。ガーディアン・ラクールの祠には守護霊として、インド起源の精霊ミニスプリンス *Minisprins (minis prins)* とマダガスカル起源の精霊パパ・マルガス *Papa Malgas* がいるとされます。このように、モーリシャスでは家の守り神として、インド系の人であっても、インド起源の精霊とマダガスカル起源の精霊の両方を祀っているのです [De Salle-Essou 2011]。下掲の写真は、インド系モーリシャス人でヒンドゥー教徒の夫婦二組がドゥアニ巡礼に来て、子宝祈願を行なっているようすです (図 10. 参照)。



図 10. インド系モーリシャス人（ヒンドゥー教徒）のドゥアニ巡礼のようす

外国人信徒もしばしば、ドゥアニで憑依儀礼を行ないます。このような、宗教・民族・国境を超えた外国人による巡礼について、ドゥアニ信仰の宗教的リーダーで霊媒のインド系モーリシャス人 musulim のドゥアニ巡礼を事例に検討します。

ファエザル（仮称）は、インド系モーリシャス人で、スンニ派のムスリムを自称しています。モーリシャスの小物機器を造る工場の経営者で、輸出業を手掛ける社長でもあり、お金持ちです。また、モーリシャスにおけるドゥアニ信仰集団の宗教的リーダーという顔も持ち、小規模な信徒集団を抱えています。マダガスカル¹の王霊や精霊を「持っている」霊媒でもあり、「全国マダガスカル伝統治療師協会」のライセンスを持っています。1年に1、2回は信徒を引き連れてマダガスカルのドゥアニを巡礼しています。「享楽の大將軍」ラクトゥマディチャ Rakotomaditra など、様々な精霊が憑依します。ラクトゥマディチャは、英雄王アンジアナンピニメリナを支えた大將軍だったとされ、ヴァジンバの王女ないし人魚として有名なラヌル Ranoro の息子とされる精霊です。粗暴ですが親しみやすく、不道德な願い事にも応えてくれるため、人気の精霊のひとりです。

2019年10月に5泊6日で行なわれた巡礼には、ファエザルを含むモーリシャス人3人と、巡礼の「仲介業者」としてマダガスカル人女性のドゥアニ祭司マダム・リナ（仮称）が付き添い、儀礼音楽師の若者3人、マダガスカル人霊媒も同行しました。

下記が、巡礼の行き先を示した地図です（図 11. 参照）。イメリナ地方のドゥアニ3か所を巡礼した後、飛行機でサカラヴァ地方に飛び、サカラヴァ地方の中心的ドゥアニを参拝して、モーリシャスに帰国しました。巡礼先では毎回憑依儀礼を行ないました。

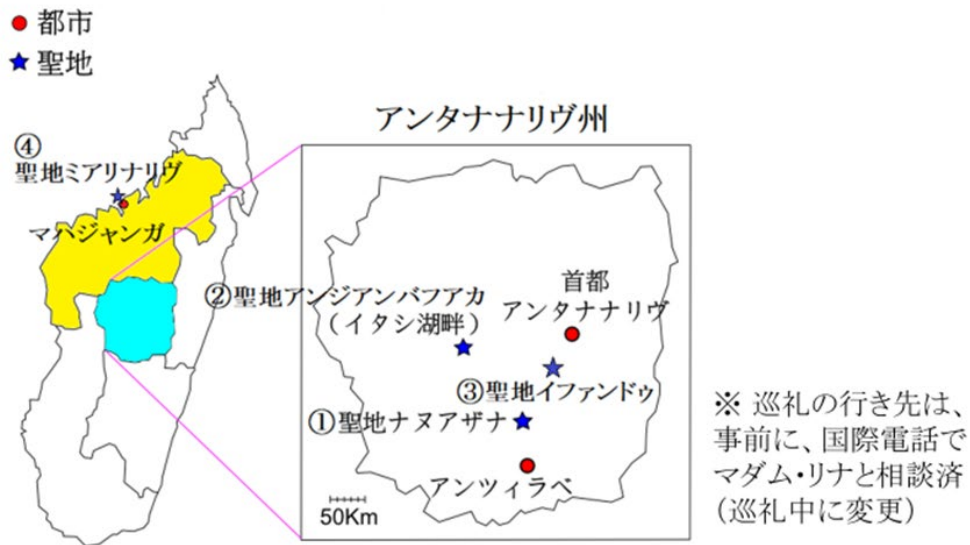


図 11. インド系モーリシャス人らのドゥアニ巡礼行 (2019 年 10 月、5 泊 6 日)

下掲の写真は、ファエザルらが聖なる温泉を祀るドゥアニを巡礼したときの様子です (図 12. 参照)。このときファエザルには、「享樂の大將軍」ラクトゥマディチャの精霊が憑依し、憑依状態の彼はビールやラム酒をがぶ飲みしていました。



図 12. 「享樂の大將軍」ラクトゥマディチャが憑依したファエザル (温泉のドゥアニ・ナヌアザナ)

それではなぜ、ファエザルはドゥアニ信仰に足を踏み入れたのでしょうか。ファエザルはその理由として、1. マダガスカルの精霊に呼ばれ、憑依されたため。2. モーリシャスに存在するとされるインド起源の悪霊に対抗するため。の 2 つの理由を挙げていました。

その一方で彼は、イスラームを大切にしているムスリムであるということも強調しました。しかし、

彼がイスラームを大切にするのは、イスラームが良いものであるという理由に加えて、自身のインド起源のアイデンティティも理由に挙げていました。そして、宗教的寛容のファクターとして「想像上のインド」を措定することで、ヒンドゥー教をも肯定するという態度を示しました。

また彼は、モーリシャスに存在するとされるインド起源の悪霊に対抗しうるものとして、マダガスカルのドゥアニを挙げており、やはりインドというファクターを活用することで、イスラームからすると「異教」であるドゥアニを肯定するという語り方をしていました。

つまりファエザルは、「想像上のインド」を宗教的寛容のファクターとして措定し、インド起源の要素をモーリシャスを通じてマダガスカルに繋げることで、イスラームとドゥアニという異なる実践を同時に行なうことを可能にしていたと考えられます。

ファエザルのような、メリナ人から見れば周縁的存在・部外者であっても、祭祀対象に憑依されている限りにおいて、彼らは祭祀対象として扱われ、一時的にはあるもののマダガスカルないしメリナの伝統の中心に位置することができます。このことは宗教的リーダーに限らず、憑依実践が可能な信徒たちに対しても言うことができます。彼らは、ドゥアニ信仰の祭祀対象を自身に憑依させることで、メリナ人の伝統という壁を易々と乗り越えてしまうのです。このことは、憑依儀礼チュンバをとおした越境と言えるでしょう。

このことを、ファエザルに憑依していたラクトゥマディチャと呼ばれる精霊を事例に考えてみます。ファエザルと契約関係にあるラクトゥマディチャの精霊は、ファエザルと共にモーリシャスへと渡り、ファエザルの肉体のうえに「再イメージ化」されて顕現することを繰り返す中で、ファエザルと共に新たな経験を積んでラクトゥマディチャ・ダッシュへと存在が更新されていきます。その一方で、多くの人々に想起される永遠不変の歴史的存在としてのラクトゥマディチャのイメージ（反復される歴史性）へと引っ張られ、ラクトゥマディチャ・オリジナルへと回帰していく運動も生じます。

このような、「更新と回帰」の絶え間ないイメージの往還構造の中で、憑依霊は、ひとつのラクトゥマディチャという運動体として、存在が維持されていきます。

この結果、ラクトゥマディチャの信仰は、憑依の経験を通して海を越えてモーリシャスにまで拡大され、ラクトゥマディチャの存在は異国の地であるモーリシャスで顕現する正統性を得ていくことになります。このようにして、憑依儀礼チュンバをとおして信仰が拡大しているものと思われます。

下記が、西インド洋における、巡礼を介したドゥアニ信仰の生成と発展の模式図です(図 13. 参照)。西インド洋の島々からマダガスカルのドゥアニに巡礼に来た人々は、ドゥアニから呪薬・呪物を持ち帰って自分の島に新たなドゥアニを建立したり、あるいは新たな精霊を自分の島に持ち帰ります。このようにモノや精霊をとおして信仰が拡大しています。

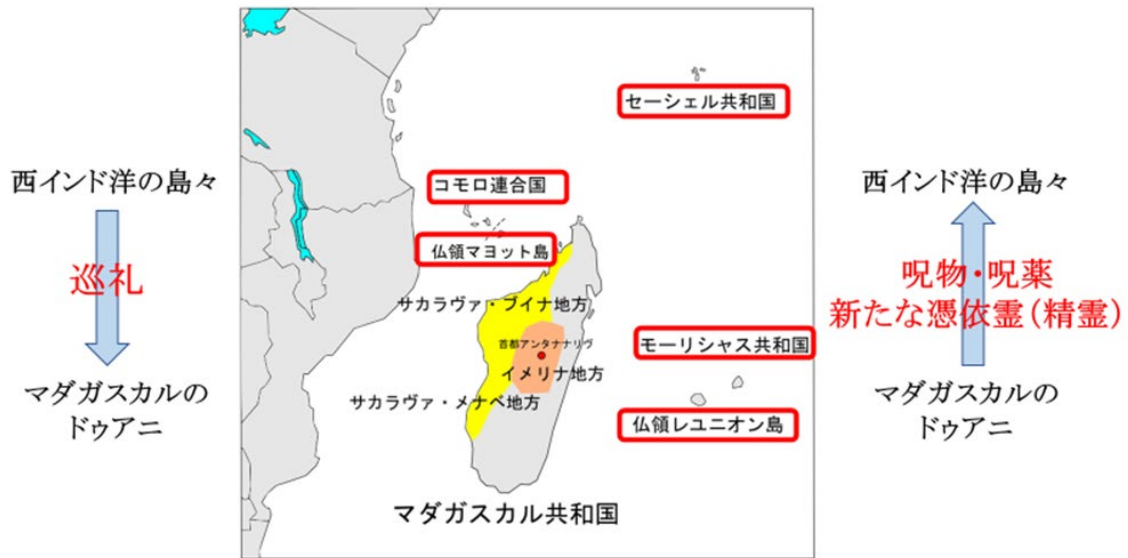


図 13. 巡礼を介したドゥアニ信仰の生成と発展

5. ドゥアニ信仰の発展

それでは現在生じつつあるドゥアニの発展を、具象化の観点から検討します。まずは、祭祀対象の図像化です。

下掲の写真は、あるドゥアニの祭祀対象です（図 14. 参照）。メリナ王国の偉大な占星術師とされます。この人物は、もともとどのような姿形をしていたのか分かっていませんでした。一番左の王冠をかぶった王様のような姿が、40年ほど前に描かれた祭祀対象です。抽象的な姿をしています。次の真ん中の図像が20年ほど前に描かれたもの、そして右の図像が2019年に描かれたものになります。当初は曖昧だった姿が、次第にハッキリとしてくるのがよく分かります。こうした祭祀対象は、チンジマンジ *tsindrimandry* と呼ばれる霊的導きによる直観や、憑依儀礼をとおして現われる中で、姿形が明確化してきたのだといえます。



図 14. 時代と共に徐々に明晰になる祭祀対象のイメージ

こちらは、憑依霊が具体的な姿として表現される事例です。下掲の7枚の写真は、すべて同じ霊媒の写真です(図15. 参照)。見た目が異なるのは、憑依した精霊ごとに異なる衣装を着て、異なる装飾を施しているためです。どのような衣装や装飾なのかは、精霊ごとに定まってきました。そこで、特定の衣装を霊媒が着ることで、その精霊の姿が視覚的に表現されることとなります。ちなみにこの写真の精霊たちは、伝統ある祭祀対象ではなく、新たに登場してきた精霊たちです。



図15. 憑依した精霊ごとに異なる衣装を着る霊媒

次は信仰の具象化としての社殿化の事例です(図16. 参照)。もともと聖なる岩とか、祭祀対象の墓しかなかった場所に社殿が建つ現象です。これは、祭祀対象が憑依儀礼や靈感などをつうじて姿を現し、信者たちに直接、社殿を建てるように命令します。すでに社殿が建っている場合でも、より立派な社殿に建て替えるように命令することもあります。また、祭祀対象が具体的なキャラクターとしてイメージされることで、社殿の内部構造を、祭祀対象にとってより居住性の高いものに変更する場合があります。そうすることで例えば、祭祀対象が休むためのベッドが新たに設置されたりもします。



新築(2000年)



建て替え(2018年)



祭祀対象の
ベッドの設置

図 16. 信仰の具象化としての社殿化の事例

下記は、信仰の具象化による図像化・社殿化のエージェンシー（他の存在に影響を与える作用の力）の模式図です（図 17. 参照）。憑依儀礼や霊的導きをつうじて祭祀対象が具体化されることで、祭祀対象の姿が図像化され、祭祀対象が具体的なキャラクターとしてイメージされることで、既存の社殿の居住性の向上が図られます。また、憑依儀礼や霊的導きを通じて、祭祀対象が直接、社殿の新築を命令します。

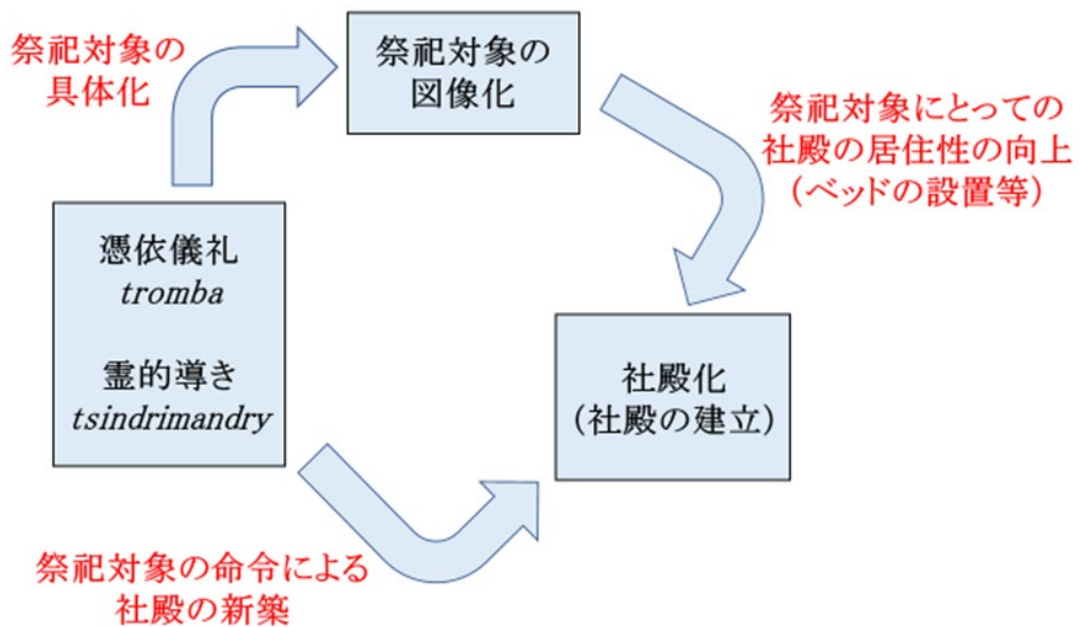


図 17. 信仰の具象化による図像化・社殿化のエージェンシー

この他にも、ドゥアニ信仰の生成発展を示す重要な点を3つ挙げます。ひとつは、祭祀対象の命令による「伝統の変更の正統化」です。これは例えば、祭祀対象が「直接」許可を出すことにより、ド

ウアニの祭司に異民族が就任することが正当化されるといった事例です。

もうひとつは、脱メリナ化・汎マダガスカル化と、マダガスカル国家性の強調です。これは例えば、聖域内や社殿内にマダガスカル国旗を掲げ、社殿・施設・聖なる石などをマダガスカル国旗色の赤・白・緑に彩色することに現れています。

そして最後に、祭祀対象のパンテオンの創造です。メリナ王アンジアナンプイニメリナを中核に、歴史的事実とは異なる神話（ないし歴史伝承）が創造され、ベツィレウ人 **Betsileo** など異民族も含めた様々な王霊・精霊を再編成する、祭祀対象の統合によるパンテオン化の現象が見られます。なお、アンジアナンプイニメリナに並び立つ頂点として、サカラヴァの英雄王アンジアミサラ **Andriamisara** が置かれます。

下掲が、マダガスカル国旗色に彩色された社殿・祠・祭祀場所と、社殿内や聖域内に掲げられた国旗の写真です（図 18. 参照）。



国旗色に彩色された社殿・祠・祭祀場所、
聖域内に掲げられた国旗

国旗が掲げられた社殿内

図 18. 国旗色に彩色された社殿・祠・祭祀場所と、社殿内や聖域内に掲げられた国旗

次に、個別のドゥアニを取り上げて検討します。拙著『躍動する聖地』では、下掲の表と地図に載せてある 18 か所のドゥアニを扱っていますが（表 1. 図 19. 参照）、紙幅の関係から、本稿では 2 か所のみ取り上げます。一覧表の青く塗ってあるドゥアニです（表 1. 参照）。

表 1. 拙著『躍動する聖地』に登場する主なドゥアニの一覧

※略称の意味:M=メリナ、S=サカラヴァ、B=ベツィレウ

地図番号	ドゥアニ名	主たる祭祀対象の名前(肩書き)	その他の祭祀対象	起源	墓の有無	社殿の有無
1	マンガベ	アジ アチアチ (M占星術師)	M・B王国の偉人、人魚など	M・B王国	○	○
2	アンバトンドラダマ	ラダマ I 世(M王)、アジ アミサ(S王)	M・S王国の偉人、小人など	M王国	×	○
3	アンカズマラザ	アジ アチアチ (M王)、アジ アミサ(S王)	M・S王国の偉人、人魚・小人など	M・S王国	×	○
4	マハザザ	アジ アチアチ (M占星術師)	M王国の偉人	M王国	○	○
5	アンブアタニ	アジ アババ (M王)	M・B王国の偉人、呪物サンビなど	M王国	○	○
6	マハマシナ	アジ アシカ (M王)	M・S王国の偉人、小人など	M王国	×	×
7	ダディラヒ	アジ アミサ(S王)	S・M・B王国の偉人、キリスト教・仏教の霊など	S・M・B王国など	×	○
8	アンツブル	ラガ I 世(M王)、ラガ II 世(M王)	M・S・B王国の偉人、人魚・小人・フランス人の霊など	M王国	×	○
9	アンジャヌル	ラヌル (ヴァジンバないし人魚)	ヴァジンバ・人魚、M・S・B王国の偉人など	ヴァジンバ祭祀	×	○
10	イファンドウ	ラトマデ (M将軍・戦士)	M王国の偉人、水の精霊など	M王国	○	○
11	ナヌアザナ	温泉ごとに異なる精霊	M王国の偉人、人魚・水の精霊など	温泉	×	○
12	ムラチアズ	温泉ごとに異なる精霊	M王国の偉人、人魚・水の精霊など	温泉	×	△(小屋)
13	アンジアンバフアカ	アジ アババ II 世(イマム王)	イマム王国の偉人など	イマム王国	○	○
14	アンジアンツィハニカ	アジ アハニカ(M偉人)	M王国の偉人など	M王国	○	×
15	ミアリナリヴ	アジ アミサ(S王)	アジ アミサ・エファ・ダヒ(4人のS王)	S王国	△(聖遺物)	○
16	アンバラキーダ	アジ アミサ(S王)	アジ アミサ・エファ・ダヒ(4人のS王)	S王国	×	○
17	チンジュアリヴ	アジ アミサ(S王)	アジ アミサ・エファ・ダヒ(4人のS王)	S王国	×	○
18	バラマンガ	アバ ラサ(人魚)、アバ ラカラ(人魚)	人魚・水の精霊など	精霊祭祀	×	○

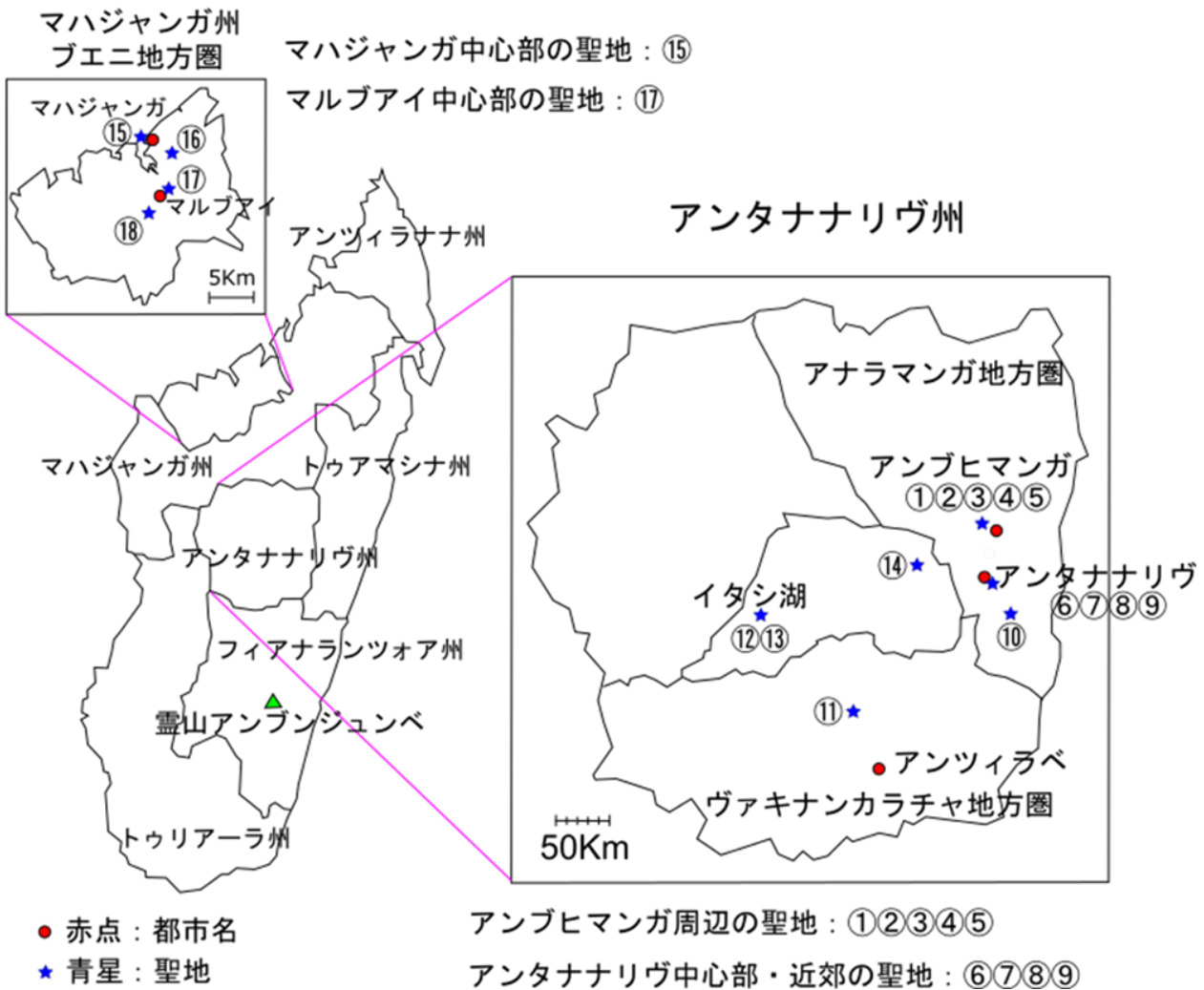


図 19. 拙著『躍動する聖地』に登場する主なドゥアニの位置

個別事例の検討①：ドゥアニ・アンジアンバフアカ

個別事例の一つ目として、まずはドゥアニ・アンジアンバフアカ Andriambahoaka を取り上げます。首都アンタナナリヴから西に約 130 キロの位置にイタシ湖 Lac Itasy という湖があります。このイタシ湖の南岸にドゥアニが位置しています（図 20. 参照）。ここは、17 世紀ごろイメリナ地方西部に存在したイمام（Imamo）王国のアンジアンバフアカ II 世（別名：アンジアンバフアカフヴァニタニ Andriambahoakafovoanitany）の王墓を中心とするドゥアニです。

①ドゥアニ・アンジアンバフアカ、②温泉のドゥアニ・ムラチアズ Moratsiazo、③アンペフィ Ampefy 市街地（ドゥアニ・ラヌル Ranoro）

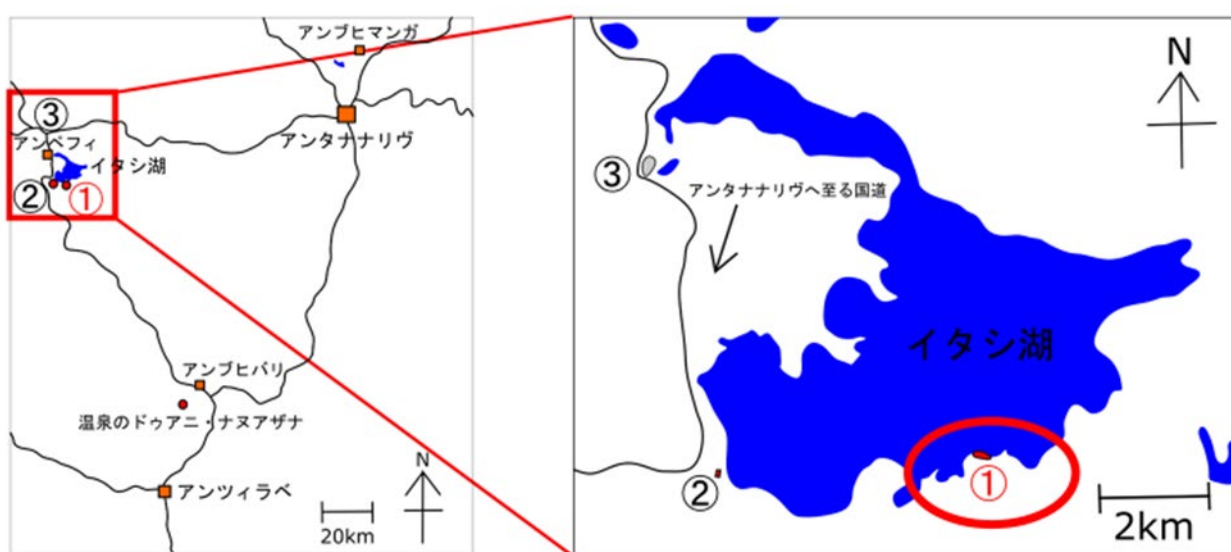


図 20. ドゥアニ・アンジアンバフアカの位置

これがドゥアニ・アンジアンバフアカの聖域図です（図 21. 参照）。ここ 20 年以内に社殿を建て替え、様々な施設を新築しました。地図中の赤色が建て替えた建物、青色が新築した建物です。

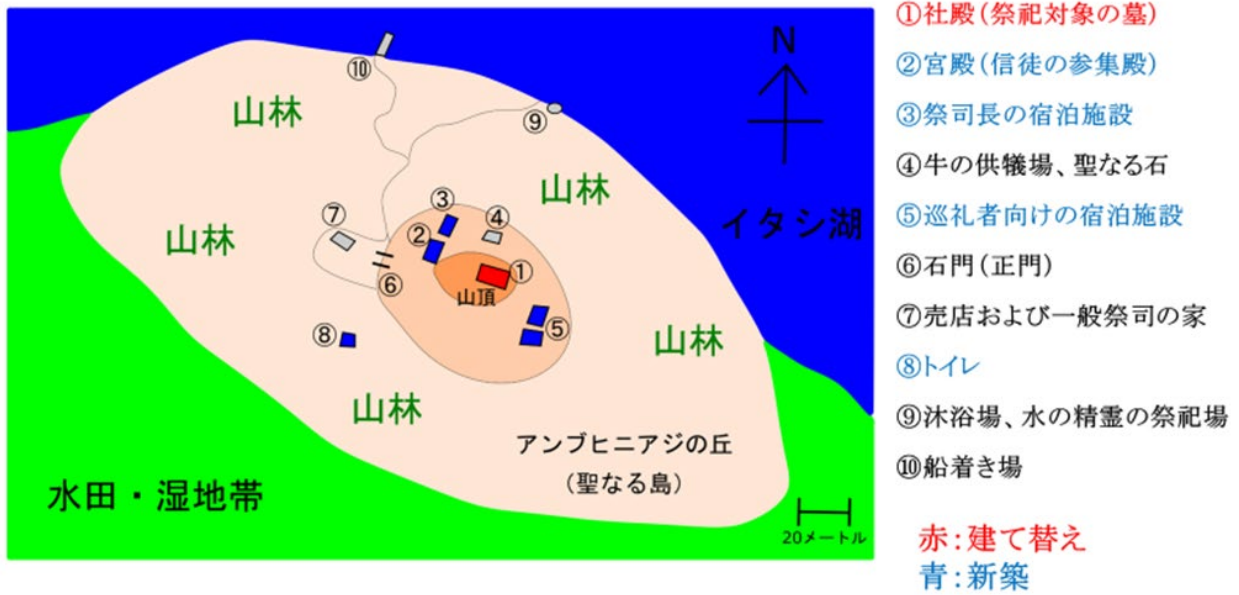


図 21. ドゥアニ・アンジアンバフアカ聖域図

下掲は、湖側からドゥアニを見た写真です(図 22. 参照)。山頂に社殿が位置し、その下に宮殿と称する参集殿が立地します。巡礼者の増加に伴い、巡礼者向けの宿泊施設も 2 棟新築しました。

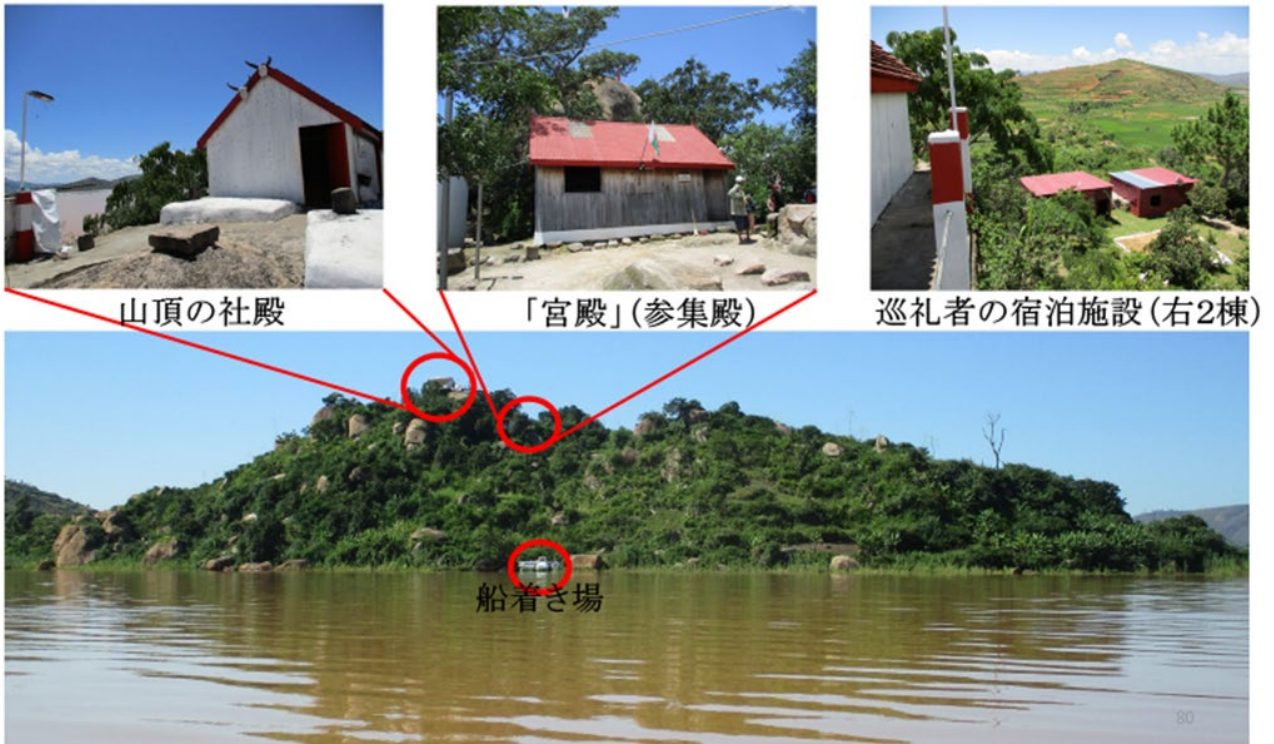


図 22. 湖側から見たドゥアニ・アンジアンバフアカのようす

これはドゥアニ中心部の配置図です(図 23. 参照)。図の中の 10 番に示しているように、このドゥアニにはソーラーシステムによる電灯が設置されています。

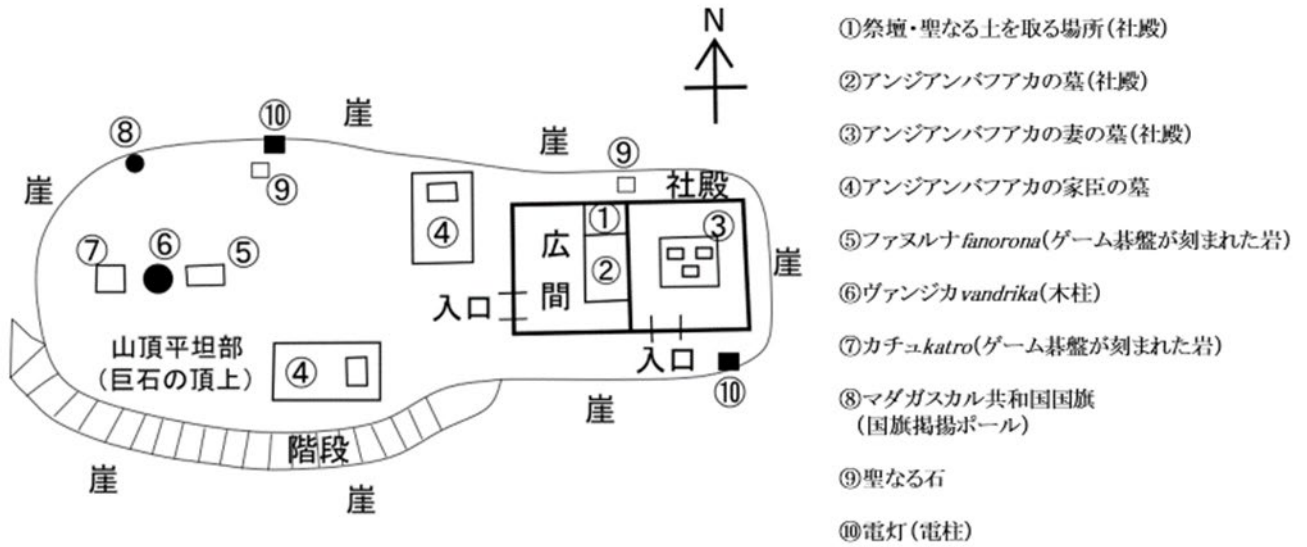


図 23. ドゥアニ・アンジアンバファアカ中心部の配置図

それでは、ドゥアニの社殿がかつてどのような様子だったかをお見せします(図 24. 参照)。左が、マダガスカルが植民地化されて 8 年後の 1904 年の写真です。社殿は荒廃し、灌木に覆われているように見えます。真ん中が、植民地時代後期の写真です。石垣が生まれ、その上には見えづらいですが小さな社のようなものが見えます。そして右が、2019 年時点の社殿の写真です。明らかに社殿が立派になっているのが分かります。



図 24. ドゥアニ・アンジアンバファアカの社殿の推移 (1904 年～2019 年)

以上のように、ドゥアニ・アンジアンバフアカでも、他のドゥアニとも共通する現象である、信仰の具象化としての社殿化が見られました。これは、ドゥアニ社殿の建て替えと、ドゥアニ施設の新築・増設です。

それに加えてアンジアンバフアカでは、脱メリナ・汎マダガスカル化を推進しており、メリナ人の聖地ではなくマダガスカル人全体の聖地であることを標榜しています。祭司長自身はメリナ人ですが、祭司の一人にマダガスカル南部出身のマハファリ人 Mahafaly が就任しています [江端 2022]。

さらに、このドゥアニで特徴的なのは、祭司長が高学歴の高所得者で、信徒集団を現代的なメンバーシップ制に変えるなど、ドゥアニの経営刷新を行なっていることです。正会員にメンバーズカードを発行し、年会費を納入させていますが、これはドゥアニとしてはとても珍しいことです。また、経営刷新の一環として、聖域内を電力化したり、マスメディアを積極的に活用しています。

個別事例の検討②：ドゥアニ・アンカズマラザ

個別事例の二つ目として、ドゥアニ・アンカズマラザ Ankazomalaza を取り上げます。アンカズマラザは、聖なる王都アンブヒマンガの周辺に位置する5つの聖地のひとつです。首都の北東21キロの地点に位置します (図 25. 参照)。また下掲が、聖なる王都アンブヒマンガ周辺の聖地の立地図です (図 26. 参照)。

メリナ王国時代、首都がアンタナナリヴに移された後も、旧王都アンブヒマンガは王国儀礼を行なう場所として聖地とされました。アンブヒマンガには重要な王墓が立地し、メリナ人の文化的アイデンティティの最も重要な象徴となってきたのです。アンブヒマンガは城塞 (王宮・王墓) を囲むようにして数々の聖地 (ドゥアニ) が立地し、現代においても多くの巡礼者を集める一大聖地となっています。

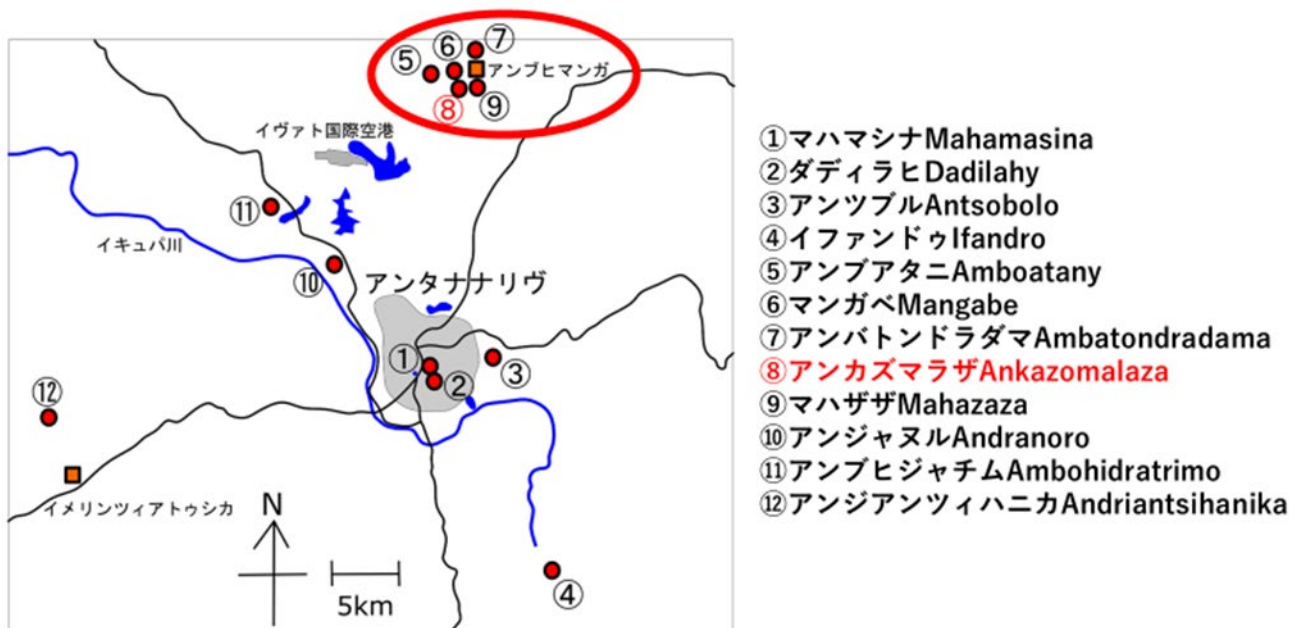


図 25. アンタナナリヴ周辺のドゥアニの位置



図 26. アンブヒマング周辺のドゥアニの聖地 立地図

これがドゥアニ・アンカズマラザの地図です (図 27. 参照)。地理的には、山麓の湧水地周辺にドゥアニが立地しています。赤色で示したのが、既存のドゥアニに社殿を新築したところ、青色で示したのが、過去5年以内に、ドゥアニそのものを新設したところになります。新しくできたドゥアニのうち2つは、ザザバビンジャヌ (水の女精霊ないし人魚) *zazavavindrano* という新たな精霊を祀るドゥアニでした。



ドゥアニ関連施設

- ① アンジアナンブイニメリナ Andrianampoinimerina
- ② アンジアミスラ Andriamisara
- ③ ネニベ・ラヴラ Nenibe Ravola
- ④ ラヌファイシヤナ Ranofraisana
- ⑤ ラクトゥマディチャ Rakotomaditra
- ⑥ ラランブ Ralambo
- ⑦ カラヌル kalanoro
- ⑧ ヴニパイスマヴケリ Voni-paiso Mavokely
- ⑨ マドモワゼル・ヴルルナ Mademoiselle Vololona
- ⑩ 宗教的リーダーのドゥアニと巨大魔法陣
- ⑪ 占星術師の家
- ⑫ 墓
- ⑬ アンカズマラザ集落
- ⑭ 参拝者・巡礼者向けの売店

赤: 社殿の新築

青: ドゥアニの新設

図 27. ドゥアニ・アンカズマラザの地図

「有名な木のある場所」という意味のアンカズマラザには、様々なドゥアニが立地していますが、中心的な聖地は、メリナ王アンジアナンプイニメリナと、サカラヴァ王アンジアミサラが戦いの末に和解した際に、二人の王がそれぞれ植えたと言われる「聖なる木」を祀るドゥアニです。赤い布に囲まれた中に木が立っています（図 28. 参照）。

歴史的な事実としては、この二人の王は会うことはありませんでした。二人の王は、異なる時代の人物だからです。（アンジアナンプイニメリナ王は 18 世紀後半から 19 世紀初頭の人物で、アンジアミサラ王はマダガスカル南部を拠点としていた 17 世紀前半頃の人物です。）しかし、ドゥアニ信仰における神話的な想像力の中で、時代の異なる二人の王が戦い、会話を交わし、そして和解して義兄弟となったのです。実際の歴史としては敵対することが多かったメリナ人とサカラヴァ人ですが、ドゥアニ信仰の神話的想像力の中では和解を達成したのです [江端 2022]。

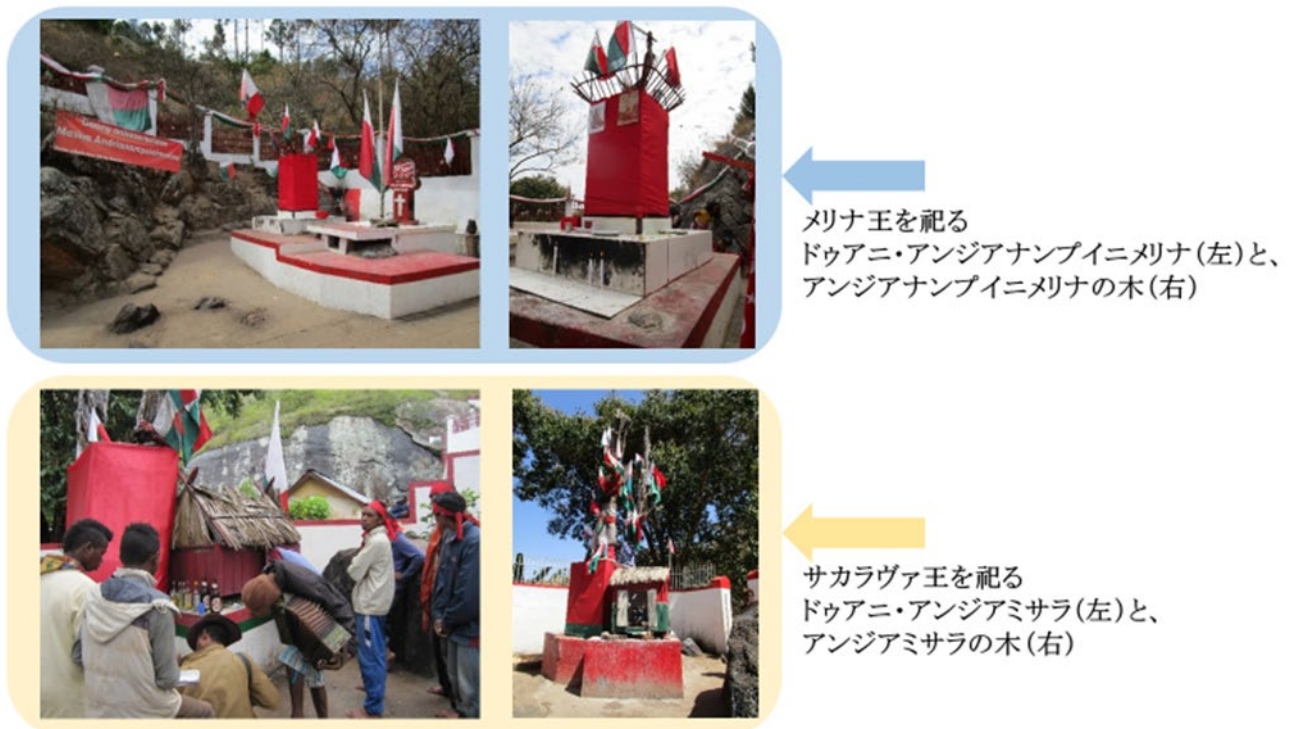


図 28. メリナ王とサカラヴァ王の「聖なる木」を祀るドゥアニ

以上のように、ドゥアニ・アンカズマラザでも、新たな精霊を祀るドゥアニの新設や、既存のドゥアニの社殿を新築するといった、ドゥアニ信仰の具象化・社殿化が見られました。

またアンカズマラザは、ドゥアニ信仰における神話的想像力による民族の和解、そしてメリナ王アンジアナンプイニメリナと、サカラヴァ王アンジアミサラを中心とするドゥアニ信仰のパンテオン生成の良い例とも言えます。

加えてアンカズマラザには、外国人の巡礼者集団の「仲介業」を行なうドゥアニ祭司が存在し、西インド洋の島々とマダガスカルを繋ぐドゥアニ信仰ネットワークの結節点としても機能しています [江端 2022]。

6. 考察と結論

考察と結論に入ります。イメリナ地方のドゥアニ信仰においては、メリナ王国の英雄王アンジアナンプイニメリナを「主祭神」とするような形で新たな神話が創造され、「民族と時代を超えた祭祀対象の統合によるパンテオンの創出」という現象が見られました。ただし、アンジアナンプイニメリナが単独の頂点というわけではなく、彼の同盟者として、神話的想像力の中で時空を超えた友情を育んだサカラヴァ王国の英雄王アンジアミサラが存在しました。このパンテオンには、ベツィレウ人など様々な民族の王霊・精霊たちも含まれていました（図 29. 参照）。このような現象が生じてきた要因としては、以下のことが考えられます。

それは、もともとメリナ王国が孕んでいた越境性と、憑依儀礼チュンバが孕む越境性、キリスト教や国家との関係性という3点が挙げられます。イメリナ地方の聖地崇拜は、国家的な呪物サンピ祭祀が盛んだった時代からすでに、民族や地域を超える越境性を有していました。そうした越境性は、メリナ王国の奴隷階層が多様な異民族出身者を擁してゆく中で、増大していったと思われます。ラダマ I 世による王霊パンテオンの統合の試みも、メリナ王国が孕む越境性を反映したものでした。

植民地時代になると、サカラヴァ発祥の憑依儀礼チュンバがイメリナ地方でも受容されますが、憑依をとおして「境界を超える」という特徴を持つ憑依実践は、もともと境界性を孕んでいたイメリナ地方の聖地崇拜と容易に合体することができたと思われます。そして、そうした越境性のもと、メリナ人によるサカラヴァ地方のドゥアニへの巡礼が生じてきました。また、元奴隷階層出自の霊媒や、モーリシャス人の霊媒の事例で見たように、憑依儀礼チュンバには、憑依霊をとおして民族や社会階層を超越できるという特性がありました。

このようなドゥアニ信仰は、キリスト教に見下され、邪教・異教として敵視されてきました。ドゥアニ信仰実践者は、それへの対抗策として、マダガスカル国家性を掲げることでドゥアニ信仰の正統化を図るとともに、マダガスカル全民族の聖地としてドゥアニを表現しようとしてきました。

以上のように、「越境性」を基軸とする様々な要因が織りなす歴史的経緯の積み重ねの中で、民族を超えるパンテオンが生成され、そのパンテオンは、民族の融和を旨とする現代マダガスカル国家性によって正統化されてきたと言えるのではないのでしょうか。

また、ドゥアニ信仰で見られる祭祀対象の具体化とは、リン・ウェイピンが言うところの「擬人化」と「現地化」という文化的メカニズムであり [Lin 2015]、個性的な姿形を持つ神々から構成される「多神教化」を示していると考えられます。ただしここで注意すべきなのは、このようなパンテオン化・多神教化は、メリナ王アンジアナンプイニメリナを中心に生起しているという意味で、メリナ民族中心主義に回収されているという見方もできなくはないということです。



図 29. ドゥアニ信仰のパンテオンのイメージ

「信仰の具象化」としての社殿化は、不可視的で断続的であった伝統宗教から、可視的で恒常的なドゥアニ信仰への移行を、視覚的に示すものです。これは、ラクトゥマララらが「場所への回帰」または「歴史の結晶化」と呼ぶような現象とも言え [Rakotomalala et al. 2001]、共同体の伝統宗教から分化して個人的なドゥアニ信仰へと生成発展してきた結果の表われと言えるでしょう。

「信仰の具象化」をとおしたドゥアニ信仰の発展についてまとめます。信仰が図像や社殿などの形でモノ化・具象化されることによって、聖地や祭祀対象のエージェンシーの発揮が強化され、祭司・霊媒・参拝者などの人間と、聖地・社殿・祭祀対象・憑依霊などの非人間の間でのエージェンシーの連鎖（往還）が促進され、ドゥアニ信仰が発展しつつあると思われます。つまりドゥアニ信仰発展の特徴は、循環的な発展のスタイルにあると言えるのではないのでしょうか。

最後に、生成と発展のすえに、ドゥアニ信仰が人々にとってどのような存在となってきたのかを考察します。このことを考えるに当たっては、社会学者の大澤真幸の「不可能性」の議論を参照したいと思います。

大澤によれば、可能なことが増えれば増えるほど不可能なことも増える現代とは、「この現実」を超えることの不可能性と、ユートピア的な「他なる現実」への夢の放棄を特徴とする、と論じています [大澤 2015]。大澤によれば、現代は「不可能性の時代」であり、それは「別の角度から見れば、可能なことが増大した時代、可能性が未曾有の水準で過剰になった時代でもある。つまり、不可能性の時代は、可能なことが増えれば増えるほど、不可能なことも増える時代である。（…中略…）現代社会においては、不可能性もまた過剰である。社会関係・社会構造に関連した領域で、いわゆる「先進国」の人々が痛烈に実感していることは、「この現実」を超えることの不可能性である。20 世紀の末期に社会主義体制が崩壊した後は、人類は、ユートピア的な「他なる現実」への夢をすべて放棄したと言ってよいだろう」 [大澤 2015]と述べています。

この「不可能性」の議論で大澤が想定しているのは、「先進国の人々」ないし「日本人」です。ですから、社会状況が異なるマダガスカルの人々に、単純にこの議論を当てはめることはできません。ただし、この議論で出てくるキーワード、「『この現実』を超えることの不可能性」と「他なる現実」については、世界各地のあらゆる宗教実践の問題とも繋がっているように思われます。

それでは、ドゥアニ信仰における可能性と不可能性とは何でしょうか。ドゥアニ信仰においては、神話的想像力や憑依実践をとおして社会的な境界を超えることが可能であり、民族・宗教を超えた巡礼者が集まるようになりました。イメリナ地方のドゥアニ信仰は生成と発展の末に、現実世界の境界を超えることを可能とする「他なる現実」を創り出していたと言えるでしょう。これが、ドゥアニ信仰の可能性です。

しかし、そのようなドゥアニ信仰の可能性は、根源的に不可能性を孕むものでした。ドゥアニ信仰の祭祀対象（憑依霊）は、特定の歴史物語が繰り返し参照されることによる過去の模倣的再現（反復する歴史性）として表現されます。そしてその反復する歴史性こそが、祭祀対象（憑依霊）を祭祀対象（憑依霊）たらしめている個性なのです。しかし、祭祀対象（憑依霊）の持つ個性＝反復する歴史性とは、境界そのものであり、その境界を手放すことは、祭祀対象（憑依霊）の存在が雲散霧消することを意味します。つまり根源的に、ドゥアニ信仰は、身分階層や民族といった境界に依拠するものであり、その意味で現実を超え出すことはできないのです。ドゥアニ信仰のパンテオン化において、メリナ人中心主義の側面が無いとは言い切れない点も、こうしたドゥアニ信仰の不可能性によるものと思われます。

以上のように、ドゥアニ信仰の可能性は、不可能性を孕んで成立していました。しかしドゥアニ信仰実践者にとって、祭祀対象（憑依霊）の持つ境界（＝不可能性）とは、実践者自身を権威づける力の源（＝可能性）でもあります。これは、元奴隷階層出自の霊媒が、自身に王霊を憑依させることで、王家と霊的な親族関係を結び、そのことで自身が権威を得るという実践に典型的なものです。

つまり、イメリナ地方で生成発展しつつあるドゥアニ信仰で行なわれていることとは、不可能性は不可能性として飼い慣らしながら、可能性の論理に焦点を当てて、そこから自分に合った力の源（＝可能性）を取り出して活用する実践であると言えるのではないのでしょうか。

引用文献

- 石井美保. 2003a. 「アフリカ宗教研究の動向と課題—周辺化理論と近代化論の限界をこえて」『人文学報』88号. pp. 85-100.
- 石井美保. 2003b. 「精霊の流通—ガーナ南部における宗教祭祀の刷新と遠隔地交易」『民族学研究』第68巻第2号. pp. 189-213.
- 江端希之. 2017. 博士予備論文「マダガスカル・イメリナ地方における聖地ドゥアニの生成と発展—守護者ピアンジュの役割に注目して—」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻.
- 江端希之. 2022. 博士論文「マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ信仰の生成と発展—信仰の具象化に着目して」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻..
- 大澤真幸. 2015. 「「可能なことが不可能だ」という時代」太田出版 web 連載ブログ『路上の人』2015年3月17日.
- ブロック, モーリス. 1994. 『祝福から暴力へ—儀礼における歴史とイデオロギー』田辺繁治・秋津元輝訳, 法政大学出版局.
- ラトゥール, ブルーノ. 2019. 『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳, 法政大学出版局.

- Andoche, Jacqueline. 2007. Jeux d'ombre et de lumière: L'inversion sorcière dans la pratique de deux désenvoûteuses réunionnaises. *ethnographiques.org*. No. 14.
- Andriamanjato, Richard. 2013. *Le Tsiny et le Tody dans la pensée malgache*. L'herne.
- Ballarin, Marie-Pierre. 2006. Culte des ancêtres royaux et légitimation du pouvoir dans la région de Majunga (nord-ouest de Madagascar), 1822-2004. *Journal des Anthropologues*. No. 104-105. pp. 191-217.
- Baré, Jean-François. 1980. *Sable rouge: Une monarchie du Nord-Ouest malgache dans l'histoire*. L'Harmattan.
- Benoist, Jean. 1998. *Hindouismes créoles. Mascareignes, Antilles*. Éditions du CTHS.
- Berg, Gerald Michael. 1975. *Historical Traditions and the Foundations of Monarchy in Imerina*. University of California, Berkeley.
- Blanchy, Sophie., Jean-Aimé, Rakotoarisoa., Beaujard, Philippe., Chantal, Radimilahy. eds. 2006. *Les dieux au service du peuple: Itinéraires religieux, médiations, syncrétisme à Madagascar*. Karthala.
- Brown, Mervyn. 2001. *A History of Madagascar*. Markus Wiener Publishers.
- Cabanes, Robert. 1972. Cultes de possession dans la plaine de Tananarive. *Cahiers du Centre d'Etudes des Coutumes, Université de Madagascar*. Vol. 9. pp. 33-66.
- Campbell, Gwyn. 1988. Slavery and Fanompoana: The structure of forced labour in Imerina (Madagascar) 1790-1861. *The Journal of African History*. Vol. 29. No. 3. pp. 463-486.
- Campbell, Gwyn. 2012. *David Griffiths and the Missionary "History of Madagascar"*. Brill.
- Cole, Jennifer. 2001. *Forget Colonialism?: Sacrifice and the Art of Memory in Madagascar*. University of California Press.
- Corrèges, Déborah. 2016. Les sites de culte ancestraux, entre histoires locales et mondialisation des ressources (Ankaratra, Madagascar), *Journal des africanistes*. Vol. 86-1. pp. 60-84.
- De Salle-Essoo, Maya. 2011. Le profane et le sacré dans les tradipratiques à l'île Maurice. These pour obtenir le grade de docteur de l' Université de la Réunion.
- Delivré, Alain. 1974. *L'histoire des rois d'Imerina: Interprétation d'une tradition orale*. Publications de la Société d'ethnologie, Nanterre.
- Didier, Pierrine. 2017. Valorisation de la médecine traditionnelle à Madagascar : place des tradipraticiens dans les recherches et formations sur les plantes médicinales. In Sciences Po. ed. *Autrepart: Revue de sciences sociales au Sud, Savoirs autochtones et développement*. Presses De Sciences Po. pp. 159-172.
- Domenichini, Ramiamanana. B. and Domenichini, J. P. 1982. Aspects de l'esclavage sous la monarchie Merina. *Omalý sy Anio*. No. 15. 53-98.
- Dumas-Champion, Françoise. 2008. *Le mariage des cultures à l'île de la Réunion*. Karthala.
- Ellis, Stephen. 2014 (1985). *The Rising of the Red Shawls: A Revolt in Madagascar, 1895-1899*. Cambridge University Press.
- Estrade, Jean-Marie. 1985. *Un culte de possession à Madagascar: Le tromba*. L'Harmattan.
- Feeley-Harnik, Gillian. 1982. The king's men in Madagascar: Slavery, citizenship and Sakalava monarchy. *Africa* No. 52. pp. 31-50.
- Feeley-Harnik, Gillian. 1991. *A Green Estate: Restoring Independence in Madagascar*. Smithsonian Institution Press.

- Gell, Alfred. 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford University Press.
- Graeber, David. 2007. *Lost People: Magic and the Legacy of Slavery in Madagascar*. Indiana University Press.
- Hübsch, Bruno. ed. 1993. *Madagascar et le Christianisme*. Karthala.
- Janzen, John M. 1992. *Ngoma: Discourses of Healing in Central and Southern Africa*. University of California Press.
- Kneitz, Peter. 2018. The Sakalava pilgrimage as a royal service (Western Madagascar). In Ute Luig ed. *Approaching the Sacred: Pilgrimage in Historical and Intercultural Perspective*. Edition Topoi. pp. 239–275.
- Latour, Bruno. 2005. *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford University Press.
- Lin, Wei-Ping. 2015. *Materializing Magic Power: Chinese Popular Religion in Villages and Cities*. Harvard University Press.
- Lombard, Jacques. 1973. *La royauté Sakalava: Formation, développement, effondrement du 17e au 20e siècle: Essai d'analyse d'un système politique*. Éditions de l'ORSTOM.
- Molet, Louis. 1977. *La foi malgache: Cosmogonie, théologie et anthropologie (Imerina)*. Orstom.
- Molet, Louis. 1979. *La Conception Malgache du monde, du surnaturel et de l'homme en Imerina*. L'Harmattan.
- Ottino, Paul. 1998. *Les champs de l'ancestralité à Madagascar: Parenté, alliance et patrimoine*. Karthala.
- Pourchez, Laurence. 2000. Passages. De l'hindouisme aux pratiques thérapeutiques et rituelles. Illustrations d'un processus d'interculturalisation à La Réunion. In Benoist, Jean., Bonniol, J. L., Etang, G. L., Confiant, R., Bernabé, J. eds. *Au visiteur lumineux: des îles créoles aux sociétés plurielles: Mélanges offerts à Jean Benoist*. Ibis Rouge Editions.
- Rahamefy, Adolphe. 2007. *Sectes et crises religieuses à Madagascar*. Karthala.
- Rakoto, Ignace. 1997. *L'esclavage à Madagascar: Aspects historiques et résurgences contemporaines*. Institut de Civilisations-Musée d'Art et d'Archéologie.
- Rakotomalala, Malanjaona., Blanchy, Sophie., Raison-Jourde, Françoise. eds. 2001. *Madagascar: Les ancêtre au quotidien, Usages sociaux du religieux sur les Hautes-Terres Malgaches*. L'Harmattan.
- Raharinjanahary, Lala and Gueunier, Noël. 2006. L'autodafé d'un doany: Réflexions d'étudiants malgaches autour de la destruction d'un site de culte ancestral par les militants du Réveil protestant. *Études océan Indien*. No. 44. pp. 151-181.
- Raison-Jourde, Françoise. ed. 1983. *Les souverains de Madagascar: L'histoire royale et ses résurgences contemporaines*. Karthala.
- Raison-Jourde, Françoise. 1991. *Bible et pouvoir à Madagascar au XIXe siècle*. Karthala.
- Raison-Jourde, Françoise. 1999. Social competition and the control of sacred places in rural Imerina: The case of Ankadivoribe, In Middleton, Karen. ed. *Ancestors, Power and History in Madagascar (Studies of Religion in Africa)*. Brill. pp. 283-318.
- Raison, Françoise. 2007. La coutume des ancêtres: Regards sur le XIX siècle malgache, regards d'aujourd'hui. *Histoire & missions chrétiennes*. Vol. 3. pp. 55-74.
- Raison-Jourde, Françoise. and Roy, Gérard. 2010. *Paysans, intellectuels et populisme à Madagascar: De Monja*

Jaona à Ratsimandrava (1960-1975). Karthala.

Randriamarotsimba, Vololona. 2016. La malgachisation, une expérience malheureuse pour Madagascar. *Le français à l'université*. No. 21-04.

Rossé, Élisabeth. 2021. Possession par esprit tromba et reconfiguration de rituels ancestraux en contexte de mobilité à Madagascar: Le cas de migrants tandroy, entre Toliara et leur terre ancestrale. *Cahiers d'études africaines*. Vol. 241. pp. 115-140.

Saretzki, Anja. and May, Carola. 2011. Produire un espace sacré: Controverses autour du site de la colline royale d'Ambohimanga à Madagascar. *Mondes du tourisme*. No. 3. pp. 26-40.

Scott, Margaret. 2003. *Change, Continuity, and Cultural Identity: As Traced through the People and Place of Ambohimanga, Madagascar*. University of Oxford.

Sharp, Lesley A. 1996. *The Possessed and the Dispossessed: Spirits, Identity, and Power in a Madagascar Migrant Town*, University of California Press.

Tronchon, Jacques. 1986. *L'insurrection malgache de 1947*. Karthala.

Vérin, Pierre. 1992. *Madagascar*. Karthala.

ディサ・インカルナータ

(一財) 進化生物学研究所 蒲生 康重

【和名】

なし

【学名】

Disa incarnata Lindl. (ラン科ディサ属)

【現地名】

不明

【分布】

アンタナナリヴ (Antananarivo) からフィアナランツア (Fianarantsoa) にかけての標高 1300~2100 m の開けた草原や泥炭地に生育。

【形態的特徴】

地面に根を下ろす地上性のラン、ディサ属の1種。地下に塊根を持つ草性の植物で、茎は単一で直立する。塊根は細長い楕円形をしている。茎の基部から先端に向かって茎を包み込むように多数の葉をつける。葉は線形から広卵形で、葉質はやや肉厚で柔らかい。花は、3枚のがく片がよく発達していて、側がく片は左右に張り出し、一番後ろのがく片(背がく片)は頭巾状に発達し、その背面には極めて短い距(花の後ろに突き出した中空の角状の蜜を溜める構造)を持つ。側花弁は小さく、唇弁はもっと小さい。蕊柱はその基部に収まる。花は先端に多数を総状花序につける。1花の大きさは8~12mmで、花色はオレンジ色。ちなみに種小名“*incarnata*”はラテン語で、「淡い紅色」または「肉色」という意味。

開花期は11月~3月。

【その他】

ディサ属 (*Disa*) は約170種がサハラ砂漠以南のアフリカ大陸で知られており、その他にはマダガスカルでは4種、レユニオンで1種、アラビア半島で1種が知られている。

本属の中でもっとも有名な種は、南アフリカのケープ州原産のディサ・ユニフローラ (*Disa uniflora* P.J.Bergius) であり、日本においても少量ながら栽培され園芸市場にも売られている。さらにごく少数ながらアフリカ大陸産の他の本属植物が、日本の栽培家によって数種栽培に成功しており、時折、ランのマニアックな展示即売会にて販売されているのを何回か確認している。一方、マダガスカル産の本属植物だが、本稿で紹介した種も含め、筆者は園芸市場で見たことがない。1990年代前半にとあるマダガスカル園芸業者が日本における植物関連のイベントに招待さ

れた折に、本種を含む2種のディサを持ち込んだという噂を耳にしたことがあるが、その後、市場にも出回っていないし、栽培している人の話も聞かないことから、噂が本当であったとしても維持ができなかったと思われる。

本稿で使用した写真は2012年3月ごろアンブシチャ (Ambositra) より少し東にある草原で撮影したものである。

本属を含め塊根を持つラン科植物は、乾季などの成長に適さない時期は、地上部を枯らし塊根部のみで過ごし、成長に適した時期になると地上部を成長させ開花に至るものがほとんどである。おそらく時期を違えていたら、同じ場所であっても見つけることができなかったと思われる。

またこの撮影地付近では、本種以外にもベンザミア属 (*Benthamia*) やシノルキス属 (*Cynorkis*)、サティリウム属 (*Satyrium*) 属等、他の地上性ランも多く群生しており、ラン愛好家にとって夢のような素晴らしい場所であった。

この場所を紹介してくれた著者の恩師でもある(一財)進化生物学研究所 吉田彰博士とこの時の調査に同行してくれたアンタナナリヴ大学教授 Lucien FALINIAINA 博士には深く感謝申し上げます。

また、この場所が現在でも地上性のランの楽園であり続けていることを願っている。

参考文献

Phillip Cribb and Johan Hermans. 2009 *FIELD GUIDE TO THE ORCHIDS OF MADAGASCAR*. Kew Publishing. UK. 39-51,72-113,116-124.

Hermans, Johan; Cribb, Phillip 2007 "Cynorkis from Madagascar: Describing three new taxa, their habitats and discovery on the East African Island". *The Orchid Review* Vol. 115, 248-255.



図1. ディサ・インカルナータ *Disa incarnata* 図2. 自生地の風景1



図 3. 自生地の風景 2
周囲の白い花はサティリウム属のラン



図 4. サティリウム属の 1 種 *Satyrium* sp.



図 5. 本種の自生地付近にあったベンザミア属の群生地



図 6. ベンザミア属の 1 種 *Benthamia* sp.



図 7. 本種の自生地付近のラン、シノルキス・スピノーサ *Cynorkis speciosa* Ridl.



図 8. 本種の自生地付近のラン、シノルキス・フレクスオサ *Cynorkis flexuosa* Lindl.

Moi et Madagascar vol.29

私とマダガスカル

絵・文
元青年海外協力隊
マダガスカル隊員石田



Antsirabe 大通り近辺

マダガスカルでは、普段着は欧米等から入ってくる古着を市場で買って着ている方が多いですが、洋裁店で洋服を作ってもらふ事もあります。その服の多くは、お出かけのための洋服です。人々はスーツやワンピース、ドレスなど、イベントやセレモニーで着る洋服を誂えます。

マダガスカルの洋裁店は日本と比べると、お安く洋服をオーダーできますので、そこで活動する青年海外協力隊員も試していましたが、「思っていた感じの服には仕上がらなかった」と言う声をよく聞きました。日本人は洋服のオーダーには慣れていない方が殆どなので、今回はアドバイスをお伝えします（私は洋裁師です）。

まず市場で布を買う時は、自分が注文したい洋服は、どんな布で作るのが適しているかを知る事が大切です。一概に布と言っても、薄い布から厚い布まで多くの種類が売られています。布店で布を買う際は、自分の希望の洋服の画像や、雑誌の切り抜きを持参し、どの布が良いか相談しましょう。

次に洋裁店での注文ですが、服作りの決め手は型紙作りです。少しの違いで、着心地が悪かったり、流行遅れな感じになったりします。それを避けるには、自分が持っている服で、一番着やすく好きなものを、洋裁師に渡す事です。「この服と全く同じ寸法で作ってください」と念を押してください。絶対にアレンジはしないで欲しいと伝えましょう。また、途中で仮縫いをしてもらえるのであれば、確実です。

きっと素敵な洋服に仕上がると思いますので、お試しください！

マジュンガ

写真家 堀内 孝

マダガスカル北西部にあるマジュンガ Majunga は人を惹きつけてやまない町だ。スワヒリ語もしくはアラビア語で「花の町」を意味するというこの町は、16～17世紀にかけて、サカラヴァ・ブイナ Sakalava Boina 王国の王がつくったという。インド洋交易で栄え、アラブ系やインド・パキスタン系、コモロ人など多くのイスラム教徒が移り住んだ。早朝や夕方にはモスクから礼拝を呼びかける声が響き渡り、異国情緒あふれる町である。



マハビブ地区にあるコモロ系のシャドウリ・モスク

2011年、久しぶりにマジュンガの町が見たくなり、北部から首都に向かう途中、2日ほど立ち寄ってみることにした。町には夜に着いたが、人力車のプシュ・プシュ *pousse-pousse* や三輪バイクタクシーのバジャジ *bajaj* が頻繁に行き交っていた。人通りも多くなり、町の活気がさらに増している。町の南西に広がる旧市街マジュンガベ Majungabe のホテルに荷を下ろし、翌朝、近くにあるインド人経営の食堂ムチャ・キモ *Motra Khimo* を訪ねた。ここで、マジュンガ名物のキモ *khimo* が食べられるのだ。キモとは牛のひき肉やジャガイモなどを入れて煮込み、香辛料で味付けした料理。地元の人はこちらにフランスパンを浸して食べる。チョウジがほどよく効いていて食欲をそそり、ついついフランスパンのお代わりをしてしまった。食後に飲んだ砂糖たっぷりのミルクティー（チャイ）とよく冷えた濃厚なパッションフルーツ・ジュースもおいしく、タクシー・ブルース *taxi-brousse* での長旅の疲れ

も一気に吹き飛んだ。この食堂は 1993 年、この建物の上階にあったホテル・トロピックに泊まったときに知った。いつしかホテルは廃業してしまったが、食堂は今も残り賑わっていた。当時から働いている従業員によると、ここはマジュンガで初めてキモを出した店で、今ではオーナーも 2 代目になったという。傲慢な態度で地元民の反感を買うことも多いインド人だが、マダガスカル風にアレンジされた彼らの食文化はしっかりこの町に根付いていた。



マジュンガの名物料理キモ。香辛料は控えめで食べやすい

食後は港を訪ねた。旧市街の南西地区に木造船が停泊する古い港があるのだ。インド洋交易時代の面影を今に残す、マジュンガで一番好きな場所である。ダウ dhaw 船の姿はすっかりなくなってしまったが、ブーティ botry と呼ばれる木造のスクーター船がびっしりと停まっている。翌朝出発するという船では、港に山積みされた日用品や飲料、穀物、建築資材、燃料などの積み込み作業が行われて

いた。気のいい船員は南西部出身のヴェズ **Vezo** という民族集団の人たちで、マジungaの南西にあるスアララ **Soalala**、ベサランピ **Besalampy**、マインティラヌ **Maintirano** と海沿いの町をまわり、物資の運搬をしているのだという。このルートの他にも、マジungaの北にあるアナララヴァ **Analalava** やヌシベ **Nosy Be** などの町へ向かう船もあると話していた。マダガスカルは主要な町へは物資のトラック輸送が可能だが、海沿いの町や村は雨季になると道がぬかるんで物資が運べなくなる。そんな事情を抱えたマダガスカルでは、この木造船は今も重要な運搬手段になっているのだ。「金さえ払えば、人も運ぶよ」と船員はにこやかに話していた。機会があったら、一度長い船旅をしてみたいものだ。



ブーティと呼ばれる木造のスクナー船が停泊する古い港

旧市街に戻り、町を歩いた。フランス植民地時代に建てられたベランダのある2階建ての建物が整然と並んでいる。傷みの激しい建物も目立つが、それでも美しい街並みを保っている。港近くの一角を通りかかると、ブルース・ロック・カフェ **BLUES' ROCK CAFE** と書かれた建物が目に入った。入り口に、彫刻が施された重厚な木製のドアがある。緑色に塗られた周囲の枠にも植物をモチーフにした精細な彫刻があしらわれていた。昔、タンザニアのザンジバル島で見た「ザンジバル・ドア」によく似た様式だ。インド洋交易によって、スワヒリの建築様式もこの町に入って来たのかもしれない。他にはないかと探してみたが、解体中の建物にかろうじて残っていたもの以外は見つけることができなかった。旧市街の建物の多くはインド人が所有しており、家賃が高いために空き家が増えているという。再開発による解体も進んでおり、歴史的建造物の保存が急務だと感じた。



フランス植民地時代の建物が残る旧市街マジュンガベ

午睡をし、夕方から海沿いにあるバオバブを見に行くことにした。ホテルから10分ほど歩いて行くと、道のロータリーに見覚えのある巨木が見えてきた。樹齢700年とも800年とも言われるディギタータ・バオバブ *Adansonia digitata* だ。高さ約16m、幹周りは21mに達するという。写真を撮っていると、旅行でやってきたというマダガスカル人の学生たちが幹の周りをまわり始めた。理由を聞くと、「この木の周りを7回まわると、初めてのマジュンガ旅行でも道に迷わないと言われていました。願い事もかなえてくれるそうですよ」と教えてくれた。このバオバブは不思議な力を持つ聖木でもあるらしい。

ディギタータ・バオバブはアフリカ大陸の原産で、インド洋交易でやってきたアラブ系商人が持ち込んだと言われる。このバオバブも彼らが植えたとの言い伝えがあるようだ。また現地で出会った大学生は、ブイナ王国を築いたサカラヴァの王が自分の権威を示すために植えたとの伝説を教えてくれた。最近の調査によると、このバオバブは伝えられていたよりもはるかに若く、樹齢約300年だという。果たしてどちらの言い伝えが本当なのだろうか。歴史ロマンを掻き立てるバオバブだ。



マジュンガの人びとの憩いの場ともなっているバオバブの巨木

翌日は、マハビブ Mahabibo 地区にあるレストラン・シェ・マダム・シャボー-Restaurant Chez Madame Chabaud を訪ねた。地元の食材にこだわったフランス料理とマダガスカル料理を出す店だ。普段はホテルのレストランやホテリー-hotely で食事を済ませているのだが、10年前の味が忘れられず、奮発してみたのである。店はこぢんまりしているものの、洗練されたインテリアで、相変わらず心地よい空間だった。注文したのは魚のカルパッチョと牛肉のステーキの青胡椒ソース。デザートにココナツ・プリンを頼んだ。前菜のカルパッチョもメインのステーキも10年前と味が変わっておらず、口に含むと自然に笑みがこぼれた。デザートのココナツ・プリンも、他では出会ったことのない濃厚な味わいだ。オーナーのクリスティアーヌさんによると、イノシシやホロホロチョウなどの料理も出しているという。一体どんな料理に仕上げるのだろうか。またマジュンガに来ることがあれば、必ず立ち寄りたいレストランだ。

異国情緒漂う街並みと伝説に彩られたバオバブの巨木、さらには上質の料理も味わえるマジュンガ。港町の気質なのか、人びとはとても気さくで、すぐに打ち解けられるのも魅力だ。やはりマジュンガは、いつ来てもゆったりと寛げる、居心地のいい町である。

この町をこよなく愛した深澤秀夫先生には1990年以来、親しくお付き合いいただき、大変お世話になりました。先生に出会うことがなければ、これほど長くマダガスカルに興味を持ち、通い続けることはなかったと思います。改めて感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

追悼：深澤秀夫先生

マダガスカル研究懇談会世話役代表 水田拓

マダガスカル研究懇談会の発足当時から中心になって活動していただいていた深澤秀夫先生が、2023年10月4日に急逝されました。69歳、あまりに突然の、あまりに早すぎるお別れでした。生前に先生と親交のあった皆様から追悼の言葉を寄せていただきましたので、先生が愛情をもって編集主任を務めておられたこの *Serasera* の誌上に掲載します。懇談会への多大なるご貢献に感謝しつつ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

深澤さんへの追悼の辞

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー（名誉教授）

小田淳一

深澤さんは何事においてもお洒落だった。2008年にマジungaと一緒に過ごした数日間は日本にいる時よりも一層お洒落だった。深澤さんへの追悼の辞を書き始めたら幾つかの情景の垂れ流しになってしまい、深澤さんから例の感じで皮肉を言われそうなので、代わりに厳密な詩法でガチガチに縛られた古典的なソネを書くことにした。深澤さんはこのソネをお洒落だと言ってくれるだろうか。

Décès de Déo

Il fait la vaisselle tout le temps en même temps,
Un grand chef cuisinier, croyant de la droiture
De l'océan Indien et chercheur d'aventure,
Il était friand de la pâte de piment.

Souvent nous dînions chez lui en partageant
Le filet de Zébu, une bonne nourriture,
Animal robuste et porteur d'agriculture.
Soirée de Majunga, mémoire d'un doux moment.

Que nous entendrions ses mots ironiques,
Comme Jean Paulhan, un orphiste de la rhétorique,
Si on peut l'appeler en sèvis kabaré.

Que tous ses livres trouvent héritier légitime
Dont la plupart couvrent son solide intérêt:
Madagasikara, une grande quête sublime.

地上に降りた仙人

飯田卓

研究者仲間の深澤秀夫さんが亡くなった。大先生に対して「仲間」は礼を失した表現かもしれないが、深澤さんはそれほど、多くの知人に対して（とりわけ年下の人たちに対して）親しく接して下さった。同じ理由で、「先生」でなく「さん」付けで呼ばせていただく。

それでもやっぱり、深澤さんはわたしにとって大先生である。マダガスカル研究を導いてくださった恩師という意味もあるが、幅広い文献渉猟とフィールドワークをつうじて見いだしたテーマを、どこまでも深く掘りさげて探究する徹底ぶりは、研究者ならではの仕事スタイルだった。だから世俗の風潮にはつねに距離を置き、あくまで研究対象として眺めるといった風があった。わたしが彼のことを「仙人」と呼びたくなるのはこのためだ。このことに関しては、深澤さんとの付き合いがわたしよりも長い森山工さんのほうが語るのに適していると思う。しかし森山さんは現在、未亡人のフランソワーズさんのために相続手続きや遺品整理に奔走しておられ、いまは故人を偲ぶ気持ちになれないという理由で執筆を辞退された。無理からぬことなので、将来別の機会に森山さんが深澤さんを回顧してくれることを期待して、不遜ながらわたしの思いつくまを先に記させていただく。

深澤さんと初めてお会いしたのは1993年、わたしが大学院修士2年のときだった。わたしは京都の大学にいて、深澤さんは東京の大学に勤めておられたので、わたしから自己紹介の手紙を書いたことを覚えている。古い書簡を探してみたら、それに対する深澤さんの返事が出てきた。1993年4月20日付である。そこには、マダガスカルでの調査や留学に関してわたしが抱いた疑問に対する詳細な回答が書かれていて、次のように結ばれている。

この5月29・30日の両日、弘前大学で開催される日本アフリカ学会30回大会の席上、私と東京大学大学院DC3年で文化人類学専攻の森山 工の二人がそれぞれ研究発表を行ないます。森山君は、1998年（ママ）から1991年にかけてアンタナナリヴ大学に留学し、Alaotra湖周辺のSihanaka族の調査を行なっています。仏語・マダガスカル語共に恐るべき能力をもつ若き人類学徒です。京都からは旅費がたいへんだと思いますが、もし可能ならば学会の席上でお目にかかることができると存じます。

丸ゴシック調の几帳面な楷書と、互いに面識のない若者どうしを結びつけようとする内容が、深澤さんらしさをうかがわせる。文面にあらわれているとおり、当時は森山さんも若者のひとりだったが、わたしにいたっては研究費すら取れておらず、マダガスカル研究に進めるかどうかもわからなかった。それにもかかわらず深澤さんは厭わずにわたしの相手をしてくれ、弘前でお会いしたときには「日本でフランス語を習得してからマダガスカル語を現地で習得すればよい」とか、「言葉に自信がついたら

各地を旅行しながら腕試しをすればよい」など、実戦的なことを教えてくださった。ちなみに、深澤さんが言葉の習得をととても大事にされていることは、本誌の連載をとおして読者もご存じのことと思う。

わたしが日本学術振興会の特別研究員に採用されて、めでたく研究資金を獲得してからも、深澤さんにはたいへんお世話になった。1995年に森山さんの『墓を生きる人々』が刊行されたとき、公的な郵便サービスのないわたしの調査地にそれを届けてくれたのは深澤さんだった。また、1996年に関西大学探検部の部員たちが予備調査でマダガスカルに来たときも、飯田を頼ればよいと伝言されたりしく、4人の若者がわたしの調査地にやって来た。このとき、わたしはマダガスカルのことを多少知るようになった若者として、あらたにマダガスカル研究を志そうとする若者を指導するよう期待されたのだと思う（もちろん、森山さんに較べればはるかに経験が浅かったが）。

それから30年が経とうとしている。深澤さんは、亡くなる直前まで、若い仲間たちとの交流を大切にしておられた。わたしがあらためてそう思ったのは2023年12月、那覇の深澤家を訪れて遺品の蔵書を整理したときである。

深澤さんは2023年の夏をマダガスカルで過ごしたのち、日本に向かう飛行機の機内で体調を崩し、10月4日、那覇の自宅に向かう途中の東京で息をひき取られた。東京での死亡届や茶毘の段取りのためには、森山さんや箕浦信勝さんらが奔走された。しかし那覇の自宅整理はしばらく進まなかった。深澤さんが生前に残した遺書にもとづいて、森山さんがフランソワーズさんの代理人となって動いた結果、わたしが所属する国立民族学博物館が洋書をひき取る方向で話がまとまったものの、わたし自身はなかなか大阪を離れられなかった。わたしが那覇に到着したのは、暮れも近い12月24日のことだった。

那覇ではフランソワーズさんが首を長くして待っておられ、2ヶ月間の悶々とした生活のことをわたしにうち明けられた。いつも身近にいた深澤さんが亡くなったことはもちろん、いろいろな訪問者に意思が通じないことや、マダガスカルからの書類がなかなか手元に届かないなど、心配の種は尽きなかった。わたしが話を聞いたときには森山さんも東京から来られていたので、フランソワーズさんを囲んで会食が開かれることになった。

12月26日に来てくれた松本駿弥さんは、島尻の豊見城市に住み、有機栽培の農園でバニラ作りに励んでおられる。マダガスカルにバニラ加工の研修に行くことが決まってから、2023年5月に深澤さんと初めて会ったという。7～8月のマダガスカル滞在中、彼は深澤さんと何度も会い、在留邦人はじめいろいろな人たちを紹介してもらったという。わたしは、しめし合わせたわけでもなく深澤さんとホテル・シャンガイで出会うたび、毎晩のように顔ぶれを変えて会食したことを思いだした。わたしが駆けだしの研究者だったときと同じように、深澤さんはまちがいなく、亡くなる直前まで人と人をつなぐことを楽しんでおられたのである。

研究者肌の深澤さんを仙人と呼んではみたものの、世話好きで社交的な一面は仙人のイメージからかけ離れている。深澤さんは、しばしば人界に降りてきて世話を焼く、変わり種の仙人なのだ。残念だが、彼が地上に降りてくることはもうないだろう。

深澤さん、天国でご自分のテーマを存分に追究なさってください。またお会いしたときには、手料理をふるまいながら研究成果を滔々と話してくださるのを楽しみにしています。

食にまつわる深澤先生の思い出

水田拓

深澤先生との思い出は食にまつわるものが多い。初めてお会いしたのは1995年、アンタナナリヴの在留邦人のご自宅に夕食に招かれたときだ。先生は文化人類学者らしく、マダガスカル人の米の消費量の多さについて熱く語っておられたが、同時にご自身も洗面器ほどもあろうかといううつつに大量のごはんをよそって盛大に食べておられ、その大食ぶりにはおおいに驚いた。なるほど文化人類学者はどこまでも現地の人に近づく努力をするものだと妙に感心したことを覚えている。

先生のマダガスカルのご自宅のあるマジュンガは私の調査地からそう遠くなかったのも、先生の滞在中にうまく連絡がつけばご自宅に招いていただいて、お手製のマダガスカル料理をご馳走になった。本号で堀内さんが紹介されているマジュンガの名物料理「キモ」の美味しいお店を教えてくださいましたのも先生だったように思う。調査地からアンタナナリヴに引き上げるタイミングが合ったときには、タクシーブルースでいっしょに移動し、奥様とともにタナのレストランでご馳走になったこともあった。

長年にわたり Serasera で「日本で作ろう！ マダガスカル料理」の連載をされていたのはご存じのとおりだが、紹介される料理の中にはサカラヴァ地方のものも多く、馴染みのある料理が出てくるとうれしくなって、私も Serasera を片手に何度か料理に挑戦したことがあった。その一つに（いま手元にバックナンバーがなくて料理名を思い出せないのだが）カニのトマト煮込みスープがあり、自分でいうのもなんだがこれがとてもおいしくできて、とくにごはんといっしょに食べると絶品であった。そのことを先生に伝えると、「そう、あれはごはんにかけて食べるのがおいしいんだよ」と、我が意を得たりという感じでうれしそうにおっしゃっていた。自分の料理が褒められたようで私もうれしかった。レシピどおりに作ったので、それは先生の功績なのだけれど。

懇談会大会のあとは懇親会をするのが決まりで、懇談会が発足してしばらく大会会場として使っていた京大会館の近くの小さな居酒屋の2階は、ぎゅうぎゅうに集まって賑やかにやっていたのでとくによく覚えている。最後にお会いしたのも2023年3月、京都の荒神橋近くの居酒屋の2階だった。そんなふうにさまざまな場所で食を共にさせていただいたが、どの場所でも先生はその豊富な知識で話題の中心にいらしたと思う。マダガスカル語の難解な（と私には思える）文法の話からマダガスカル精霊の話、鳥や動物の話、もちろんマダガスカル料理の話、果てはアイドルがたくさん登場する邦画の話まで、ともかく話題は尽きず、つねにまわりを楽しませてくれる先生だった。そして、今になってつくづくありがたいと思うのが、出会ったころは年若い学生であった私にも、先生はなんの分け隔てもなく接して下さったことだ。別の言い方をすれば、若いから、学生だからとかいうような理由で分け隔てをするという感覚を、先生は端から持っていなかったということだと思ふ。対人関係において先生はそれくらい真摯で公正であった。そういえば先生のご自宅にも食事会に招かれたことがあったが、そこには研究者だけでなく、ともかくいろんなジャンルの人が来ていて、このことも先生のフラットな人付き合いを象徴していたと思う。

研究分野は違えど、先生から学んだこと、今も学ぶべきことはたくさんたくさんある。深澤先生、本当にありがとうございました。

深澤秀夫先生を偲んで

永井周子

まさか、このタイミングで、このような文を書くことになるとは、夢にも思っていませんでした。深澤先生に、一体、何があったのでしょうか... 今でも、信じられない気持ちで一杯です。

心の整理が十分に出来ていない状態で恐縮ですが、この場をお借りして、先生との思い出を少しばかり記したいと思います。

初めてお目にかかったのは、2000年ごろでした。ひよんなことからマジュンガの大学病院で1か月ほど調査する機会を得た私は、現地で生活するための情報があまりに少なく途方に暮れていました。そんな折、先生のホームページに出会い、多摩のご自宅を訪問させて頂き、生きたマダガスカルの情報、更にサカラバ地方のあれやこれやまで、ご教授いただくことができました。私の中のマダガスカルは、深澤先生によって『粹組み』が作られたといっても過言ではありません。先生は私にとって、絶対的なマダガスカルの師匠でした。

タナでの宿泊先、タクシーブルースの選び方から予約の仕方、ヴィザ延長のインタビュー時の想定問答、マジュンガ郊外でのマラリアへの対処の方法等々... 生活面でのありとあらゆる疑問を先生にお尋ねしてきました。そして驚くことに、先生は一つずつ全てに対して丁寧にご回答をくださいました。最初のころは、あの独特な手書き文字での情報もたくさん頂きました。(何だか色々思い出してきました...私がマジュンガに初めてタクシーブルースで到着した時は、先生は日本にいらっしゃったので、先生から連絡を受けたフランソワーズさんがバイクで駐車場まで迎えに来てくださり、その足でマダガスカル用の携帯電話を買ってホテルまで連れていてくださったこともありました)。

生活面だけでなく、研究面でも、先生は本当に絶対的な師匠でした。

私がマジュンガで雇った研究調査員（マジュンガ大学の医学生さん）に対して、先生からインタビュー方法のご指導をいただいたことがありました。顔合わせの際、マダガスカル語でやりとりされる内容は私にはほとんど理解できないものでしたが、二人の学生は非常に熱心に先生と会話をし、あっという間に尊敬の眼差しを向けていました。するとおもむろに、深澤先生が学生さんの書いたマダガスカル語の質問紙のドラフトを添削しはじめたのです。彼らは、口語としてマダガスカル語を習得していたので、細かな文法、特に単語の語尾の表記などはいい加減な箇所がかなりあったようです。読み書きに用いる言語は学校で学んだ仏語だったことから生じた落とし穴でした。

興味深いことに、実直真面目な女子学生は、サカラバ出身ではないにもかかわらず、地元の言葉も比較的きっちり文章にできていました。一方、ややお調子者で気立ての良い男子学生は、地元出身なのに先生に添削される箇所がとても多くきまりが悪そうでした。深澤先生は、折々に私に対して日本語で概要を説明しながら、黙々と作業をすすめてくださいました。結果的にこの質問紙は、仏語を経て日本語に翻訳した後、バックトランスレーションを行っても、ほとんど齟齬がない質の良いものとなりました。今思い返しても胸が熱くなる出来事でした。

もう一つ、強く心に残っているのは、「文化を比較する」ことに対する先生の慎重な姿勢です。出産後まもないお母さん達にインタビューを行っていく中で、私たちはミファーナという慣習に出会いました。出産後、決められた日数の間、母となった女性は外出や家事が制限されるという慣習です。赤ちゃんを抱く際に、母親はハサミやナイフ等の刃物も携帯しておくという話も複数きかれました。集まった情報では、都市の周辺部に住む母親、姑の発言権の強い家の母親、若くして出産し高等教育を受ける機会を失した母親に、厳格にミファーナを守る傾向があるように思われました。

少し調べてみると、ミファーナに類似する産後の母親の活動範囲を制限する慣習は、南アジアや東南アジアからも時々報告されていることが判ってきました。そこで私は自分の中で、産後の慣習は全ての地域で母子を守るために出来てきたという仮説をたて文献検索を開始しました。マダガスカルから帰国し、勢いよく深澤先生の研究室を訪ね、私の考察を伝えたところ...なんともあっさり、やんわり、ストップがかけられました。出来事を十分に観察しないままに、自分に都合の良い部分だけを集めて意味づけしないように、とも論されました。(そしておもむろに、こんなものもあるよ、と、蔵書の中から「TABOO」という本をくださいました。表紙の絵がおどろおどろしく、ページを開くのに勇気がある本でした)。

私たち公衆衛生・医療関係者は、とかく現象に意味づけをしがちで、かつ、結果を早急に求めてしまいがちだと気付かされた出来事でした。この時の経験は、その後、タナで HIV 陽性者とかかわる仕事をした際に教訓として生かされたのではないかと、ささやかながら感じています。

その後も折々に深澤先生にはお世話になってまいりました。来年か再来年には、家族で再渡航をしたいと準備しはじめた矢先に訃報が届き、目の前が真っ暗になりました。

日々、先生に尋ねたいことが次から次へと出てきては途方に暮れています。「永井さんももう少しマダガスカル語が出来たらねえ...」といたずらっぽくおっしゃる深澤先生のお顔が目には浮かびます。今となっては、先生のホームページをさかのぼって拝読し、インターネットや翻訳機の発達に感謝しながら、渡航の準備をすすめるしかありません。

今はただ先生のご冥福をお祈りしたいと思います。どうぞこれからも私たちを見守っててください。

このような場をいただき、ご関係の皆様には深謝いたします。ありがとうございました。

SERASERA が縁で知り合った深澤先生と私

青年海外協力隊 OG 石田

私は青年海外協力隊の任期が終わり、2008年に帰国しました。

その年に、マダガスカルで描いた風景画を、マダガスカル大使館で展示させていただいた後に、深澤先生から SERASERA に絵と文を書いてみませんかとお誘いいただきました。

それから今にいたって、14年間連載が続いています。

年に二回の原稿の締め切りは、5月と11月となっています。

その少し前に深澤先生から、締め切りのご連絡をいただくことが、私にとって恒例行事でした。薄れつつあるマダガスカルの記憶の中から、どんな話や絵を描こうかなど考えることは、楽しみでもありました。

実は私は深澤先生とは、メールのやり取りだけで、一度もお会いした事はありません。

青年海外協力隊だった際に、マダガスカルの Antsirabe(首都から南東に約 170 km)に住んでいた私と、Majunga(首都から北へ約 570 km)に住んでおられた先生とは接点がありませんでした。

それが、SERASERA でのご縁で、お知り合いになりました。

いつも原稿のやり取りの間に、マダガスカルの最新情報を教えてくださった先生。

時には私の人生相談にも乗ってくださった先生。

メールのやり取りはとても楽しかったです。

マダガスカルから帰国して大分経ちましたが、私にとってマダガスカルは第二の故郷で、今でも大切な場所なのは、深澤先生のおかげです。

「こんばんは、深澤です」で始まる先生のメール。

また届くような気がしてなりません。

今まで楽しい思い出を、本当にありがとうございました。

先生との約束通り、マダガスカルでの記憶が続く限り、SERASERA の連載は続けていきます。

マダガスカル研究懇談会の今後について

マダガスカル研究懇談会世話役代表 水田拓

マダガスカル研究懇談会は、1999年に設立されて以来25年が経ちました。この間懇談会は、大会の開催やニュースレターの発行、メーリングリストの運営などを通じて、マダガスカルを愛する人たちの情報交換の場として大きな役割を果たしてきました。懇談会の運営に携わってきた世話役や事務局員のご尽力、そして会員の皆様のご協力に感謝いたします。

一方で、この四半世紀の間に社会の情勢は大きく変化しました。とくにインターネットやSNSの普及は、かつては限定的であったさまざまな情報へのアクセスを飛躍的に容易にし、顔を突き合わせて情報交換をするという懇談会の価値を、相対的に低くしてきました。そういった変化のなかで、会の運営にかかる労力とそこから得られる利益のバランスが合わなくなっているのではないかと感じるが多くなりました。はたして会員は、懇談会に参加することで会の運営にかかる労力に見合うだけのものを得ているでしょうか。

その問題が顕在化しているのが、とくに事務局の作業だと思います。事務局員はこれまで慣例的にマダガスカルで研究を行う学生が主に務めてきました。かつては、そのような労力を負っても懇談会の運営に携わることは学生にとって利益のあることだったかもしれません。しかし、社会の変化のなかで、その利益も減じつつあるように思います。ここ数年、懇談会はニュースレターのPDF化や会費の無料化を行い、運営の簡略化に努めてきましたが、それでも現状はごく一部の人のみ運営の負担がかかっています。

周りが変化していくなかでひとり現状維持を続けると、多くの場合行き詰まってしまいます。現在のマダガスカル研究懇談会はまさにそういう状況なのかもしれません。創立25周年は、懇談会の今後を考えるうえで節目の年ではないかと思えます。社会の変化に合わせて自らも変化しながら会を維持するか、それとも一定の役割を終えたと考え潔く会を解散するのか。維持するならば誰がどのような形で運営するのか、解散するならば会の資産（過去に集めた会費やニュースレターのバックナンバーなど）をどう処理するのか。このことについて話し合った世話役会では、会を維持することも解散することも同程度の可能性のある選択肢として、引き続き議論をすることになりました。しかし、もちろんこのような重大な問題は世話役だけで決められるものではありません。懇談会の会員全体の問題であり、議論が必要であると思えます。大会のときに開催される総会は本来そのような議論を行う場ではありますが、残念ながら総会に参加する会員の数は多くはありません。

そこで、この場をお借りして会員の皆様にも問いかけます。皆さんにとって懇談会はどうあってほしいか／懇談会をどうしていきたいと思うのか。解散するならタイミングはいつなのか。すぐに答えの出る問題ではありません。これから時間をかけて議論をしていきたいと思えます。ご意見のある方は懇談会メーリングリスト (member@ml.madacom.org)宛てにお送りいただけますと幸いです。

マダガスカル研究懇談会会則

1999年 4月 3日制定
2002年 3月30日改訂
2005年 4月 2日改訂
2008年 3月29日改訂
2009年 3月28日改訂
2016年 5月 1日改訂
2019年 3月30日改訂
2021年 3月27日改訂

第一章 総則

(名称)

第1条 本会はマダガスカル研究懇談会（英名：Japan Society for Madagascar Studies、マダガスカル名：Fikambanana Japoney ho an'ny Fikarohana ny momba an'i Madagasikara Madagasikara）と称する。

(目的)

第2条 本会は、マダガスカル島及びその周辺島嶼の自然・社会・文化に関する会員相互の情報交換及び交流を促進し、もってこれらに関する研究の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一 懇談会大会の開催
- 二 電子版による情報の発信
- 三 前二号に掲げる事業のほか、前条の目的を達成するために必要な事業

第二章 会員

(入会)

第4条 本会に入会しようとする者は、本会が別に定める方法により、入会を申し込むものと

する。

(会員の権利)

第5条 会員は次の権利を有する。

- 一 第14条の総会への出席
- 二 第3条第二号の電子版情報への投稿
- 三 本会の事業活動への参画

(会費)

第6条 本会の会費は、無料とする。

(退会等)

第7条 本会を退会しようとする者は、事務局（第13条に規定する事務局をいう）に対して退会を申し出るものとする。

2 世話役代表（第9条第一号の世話役代表をいう）は、世話役会の決議を経て、次の各号に掲げる会員を強制的に退会させることができる。

- 一 第2条に規定する本会の目的に著しく反する行為を行った会員
- 二 本会の活動を妨げる行為を行った会員
- 三 本会の品位を損なう等の言動又は行為を行った会員

第三章 役員及び事務局

(役員)

第8条 本会に次の役員を置く

- 一 世話役代表世話役代表 1名
- 二 世話役世話役 10名以下
- 三 会計監事 2名

(役員の仕事)

第9条 世話役代表は本会を代表し、会務を総括する。

2 世話役は、本会の庶務、会計、渉外、及び第3条各号に掲げる事業の運営を担当する。

3 会計監事は、本会の財産の状況を監査し、その結果を総会に報告する。

(役員を選任)

第10条 役員は、会員のうちから総会で選任する。

2 世話役代表及び会計監事は、役員の間選によってこれを選任する。

(役員の仕事)

第11条 役員の仕事は2年とし、再任を妨げない。ただし、世話役代表の仕事は連続2期を限度とする。

(世話役会)

第12条 世話役会は、世話役をもって構成し、世話役代表がこれを招集する。

2 世話役会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算案及び事業報告案

二 収支予算案及び事業計画案

三 会則の制定、変更又は廃止に関する案

四 役員の仕事満了等に伴う次期役員候補の選出

五 前各号に掲げるもののほか、本会の運営に関する重要な事項として世話役会が総会に上程することとした事項

六 本会の運営の実務に関する細則の制定、変更又は廃止

七 事務局(第13条に規定する事務局をいう)の場所の選定及び事務局員第13条第2項に規定する事務局員をいう)の選任

八 前二号に掲げるもののほか、本会の運営に関する事項であって、総会の決議を要さない事項

3 世話役会の議事は、出席した世話役の過半数で決する。

4 世話役代表は、第2項に掲げる事項の全部又は一部を決議する必要がある、第1項の世話役会を招集することが困難である場合には、世話役全員に宛てた電子メールその他の通信手段を利用して世話役全員による協議を行い、その過程において世話役全員の過半数が同意の意思表示をした案をもって、当該事項を決定することができる。

5 前項の決定があったときは、当該事項についての提案を可決する旨の世話役会の決議があったものとみなす。

(事務局)

第13条 本会に、世話役代表及び世話役の会務を補佐する機関として事務局を置き、その場所は、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを定める。その場所を変更する場合も同様とする。

2 事務局に事務局員を置き、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを任命する。

3 世話役代表は、第15条第2項の規定により第3条第一号の懇談会大会その他の催事の開催にあたり参加費を徴収することとし、かつ前項の事務局員が当該催事に参加する場合には、世話役会の決議を経て、その参加費を免除することができる。

第四章 総会

(総会)

第14条 総会は、会員をもって構成し、毎年1回、新会計年度開始以後4か月以内に、世話役代表がこれを招集する。

2 総会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算及び事業報告

二 収支予算及び事業計画

三 会則の制定、変更又は廃止

四 役員を選任

五 その他本会の運営に関する重要な事項として世話役会が上程した事項

3 総会の議事は、出席会員の過半数で決する。

第五章 会計

(経費)

第15条 本会の経費は、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。

2 本会は、第3条第一号の懇談会大会又はその他の催事を開催するにあたっては、その都度、世話役会の決議を経て、参加者から参加費を徴収することができる。ただし、第14条に規定する総会のみ出席する会員からは参加費を徴収しない。

3 前項の規定により参加費を徴収する場合には、世話役代表は、当該催事の開催及び参加費の額を予め会員に通知するものとする。

4 本会は、第3条各号に掲げる事業の実施にあたり、寄付金を募ることができる。

(会計年度)

第16条 本会の会計年度は、毎年1月1日からその年の12月31日までとする。

附則 (2019年3月30日)

この会則は2020年1月1日から効力を発する。

附則 (2021年3月27日)

この会則は2021年3月27日から効力を発する。

第 27 回懇談会（大会）のご案内

マダガスカル研究懇談会第 27 回大会は、下記の要領で開催されます。事前の参加申込は必要ありません。会員、非会員を問わず、ふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。なお、新型コロナウイルス感染症等の感染状況によっては、開催中止もしくはオンライン開催への変更になる場合がございます。

日時：2024 年 3 月 30 日（土）13 時 00 分～（開場 12 時 00 分）

場所：東京農業大学 「食と農」の博物館 2 階 セミナールーム

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀 2-4-28

URL: <https://www.nodai.ac.jp/campus/facilities/syokutonou/>

会場等の問い合わせ先：マダガスカル研究懇談会事務局：info@madacom.org



東京農業大学「食と農」の博物館



会場等の問い合わせ先

プログラム：

12:00～ 開場

13:00～ シンポジウム『マダガスカルの稲作農家の所得・栄養改善に向けた取り組み』
ごあいさつ・趣旨説明

13:10～ 発表 1：西垣智弘（国際農林水産業研究センター 生産環境・畜産領域）
「マダガスカル中央高地におけるイネ生産性改善に向けた土壌学的貢献」

13:50～ 発表 1 に対する質疑応答

14:05～ 休憩

14:15～ 発表 2：尾崎諒介（国際農林水産業研究センター 社会科学領域）
「マダガスカル中央高地における稲作慣行と行動変容」

14:40～ 発表 3：白鳥佐紀子（国際農林水産業研究センター 情報広報室）
「農家の食料消費と栄養供給」

15:05～ 発表 2，3 に対する質疑応答

15:20～ 休憩

15:30～ 総会

16:20～ 総会終了後、ポスター発表・懇親会参加者は 3F に移動

16:30～ ポスター発表（「食と農」の博物館 3F の（一財）進化生物学研究所 会議室付近）

17:30～ 懇親会（予定）

大会参加費： 大人 1,000 円、小人・学生等 無料。会員以外のかたもご参加いただけます。

懇親会参加費： 3,000 円（予定）

ポスター発表会も開催します。A0 縦長の大きさ（縦 119cm、横幅 84cm）ていどのスペースを割り当てますので、発表者ご自身でレイアウトと掲示および発表終了後の撤収をしてくださるようお願いいたします。なお、ポスター発表は、会員の方に限らせていただきます。発表を希望される方は、2 月末日までに、ポスター発表をする旨のメールを下記の 2 つのメールアドレスまで送り、発表者名とタイトルをお知らせください。

原稿を募集しています

SERASERA は、会員間の交流と情報交換を目的としたニュースレターです。広く会員各位からの原稿（文章／表紙写真）を募集しています。

- ◆ SERASERA は、2020 年 2 月発行の 42 号から、紙媒体の印刷物ではなく、マダガスカル研究懇談会のホームページ（<http://www.madacom.org/news/index.html>）上で電子的に公開されています。SERASERA への投稿・寄稿をめぐるご質問等については、電子メールで編集部宛て（edit@madacom.org）にお問い合わせください。

1. 原稿期限

毎年、原則 5 月 1 日に夏号の編集を、11 月 1 日に冬号の編集を開始します。この日までに、電子メールで編集部まで原稿をお寄せください（edit@madacom.org）。ただし、文章を書きなれていない方の場合には、編集部とのあいだで通常より多くのやりとりをする場合がありますので、上記の期日より早めに原稿をお寄せください。

2. 原稿形式

文章原稿はマイクロソフト社のワード形式で、写真原稿は JPG 形式でお寄せください。

3. 写真原稿

表紙写真には、撮影者、撮影場所、撮影年（月日）および 100～300 文字の解説文章を添えてください。

- 4. 編集の手間を軽減するため、表紙写真原稿ではない一般原稿の場合には、できる限り、投稿者自身が文章原稿に写真を貼りこんで整形したワードファイルを作成し、お送りください。

5. 文章原稿

分量にとくに制限はありませんが、ひとつの記事の長さは、短いもので 2000 文字でいどを目安とします。掲載希望コーナーの名まえと題名、執筆者名と所属をお忘れなく。

文章は、予備知識のない人にも内容と意図が理解できるよう、できるかぎりやさしくわかりやすい表現で書いてください。マダガスカル語の語彙や地名、人名をカタカナ表記される場合には、アルファベット表記も添えてください。アルファベット表記がわからない場合は、編集部にご相談ください。生物についての学術的な原稿の場合は、生物名のラテン学名もできるだけ添えてください。

6. 関連写真・図表

番号と短いタイトル、必要に応じて 2～3 行以下の解説を付してください。ひとつの記事につき、写真と図表あわせて 10 点でいどを上限とします。

7. 記事の出典（リソース）

自分が直接見聞していない話や、自分が集めたのではない資料については、出典（リソース）を明記してください。また、未確立の学説や根拠薄弱な仮説などが引き合いに出される場合、編集部が根拠や出典などの提示を求めることがあります。引用した文献については、著者名・文献名・出版年・出版社ないし書誌名・掲載ページ（雑誌論文の場合）などを文献リストとして末尾にま

とめておいてください。

8. 文章コメント

わかりやすさと最低限の正確さを期するため、編集部が文章に目をとおして、著者にコメントを連絡いたします。ただし、最終的な文責は寄稿者にありますので、編集部からのコメントに従うか従わないかを適宜判断して、手直しをおこなってください。この作業は、原則一回とします。**SERASERA** の発行主旨や会の活動目的に合致しない記事と編集部が判断した場合には、掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

9. レイアウトの著者校正

夏号の原稿については6月中、冬号の原稿については12月中に、レイアウトの著者校正をおこないます。この時点では、ページ数が変わるような大幅な変更ができませんので、8. に関わる手直し時まで、納得のいく文章にしあげてください。著者校正の段階で大幅な加筆訂正をされた場合には、編集部が掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

10. 刊行とウェブ公開

夏号は7月下旬、冬号は1月下旬をめどに電子的に刊行いたします。ただし、編集作業は会員のボランティア作業にもとづいておこなわれていますので、執筆者のみなさまにはその旨よろしくご理解とご協力のほどをお願いいたします。投稿された記事や画像は、マダガスカル研究懇談会のホームページで公開します。

ニュースレター編集方針

- ・ マダガスカル研究懇談会ニュースレターは愛称を「SERASERA」とします。**Serasera** はマダガスカル語で「交流」を意味し、<セラセラ>と発音します。
- ・ ニュースレターの編集は、世話役と事務局員から構成される編集部によりおこなわれます。
- ・ 編集部員の名前はニュースレター上に開示します。
- ・ ニュースレターは会員からの投稿および編集部が会員と非会員に対し執筆を依頼した原稿を記載し、発行されます。
- ・ 原稿は、会の活動目的に沿う内容とします。
- ・ その上で原稿は、その分野や領域を限定しません。
- ・ 編集部は寄せられた全ての原稿を査読し、その内容が会の活動目的に合致しているかどうか、事実関係についての誤りあるいは文章表現や表記上の誤りや不適切な箇所がないかどうかについて判断いたします。
- ・ 編集部は、執筆者に対し、原稿内容の修正を求めることができます。
- ・ 原稿のニュースレター掲載への最終的判断は、編集部に一任されます。したがって、その内容が不適切であったり、事実関係の修正がなされない場合には、編集部から依頼した原稿であっても、不採用とする場合があります。不採用の理由については、原稿の執筆者に対し編集部から通知いたします。
- ・ **SERASERA** に掲載された著作物の著作権はすべて著作者にあり、著作者は **SERASERA** に掲載された著作物を自由に利用できることとします。ただし著作者は、著作物の複製と公衆送信をマダガスカル研究懇談会に許諾したものとみなします。

2023 年度世話役・事務局・編集部・会計監事

【世話役】飯田卓・市野進一郎・蟹江康光・蟹江由紀・佐藤宏樹・高畑由紀夫・水田拓(世話役代表)
・箕浦信勝・森哲・吉田彰

【事務局】蒲生康重・篠村茉璃央・前畑晃也・増田初希・山田祐

【編集部】市野進一郎・篠村茉璃央・深澤秀夫(編集主任)・前畑晃也・水田拓・山田祐

【会計監事】杉本星子・平野智巳

マダガスカル研究懇談会 ニュースレター SERASERA 第 50 号

発行者 マダガスカル研究懇談会

〒606-8511

京都府京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学アフリカ地域研究資料センター内

2024 年 3 月 22 日発行